京都女子大学 地域連携研究センター

Annual Report 2017

RCCP

The Research Center of
Community Partnerships

目 次

はじめに……1

女性地域リーダー養成プログラム……3

「学まち推進型」連携活動補助事業

馬町空襲の歴史を学び語り継ぐ取り組み……9
文学部 史学科 教授　坂口 満宏

京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ
“ワクワク工作キャラバン”……11
発達教育学部 児童学科 教授　矢 野　真

現代のライフスタイルに合った綴織の商品開発……13
家政学部 生活造形学科 准教授　青木 美保子

京都の糸の新たな可能性……15
家政学部 生活造形学科 准教授　渡邊 敬子

乳幼児期の子ども・子育て支援実践と支援者養成……17
–京都女子大学 親子支援ひろば ぴっぱらん–
発達教育学部 児童学科 准教授　瀬々倉 玉奈

東山区における町内会運営の現状と防災活動に関する調査研究……20
現代社会学部 現代社会学科 准教授　奥井 亜紗子

「東山に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト報告……21
現代社会学部 現代社会学科 准教授　森 久　聡

京女まち歩きオープンデータソン……23
図書館司書課程 講師　桂　まに子

会議・シンポジウム

・第2回京女ラウンドテーブル……25
・連携プロジェクト報告会（京女ラウンドテーブル第2部）……27
・大学・地域連携サミットに参加……28
・メディアセッション京都にパネリストとして参加
・京女が紡ぐ京の観光と食文化……29
（京都女子大学地域連携研究センターシンポジウム）
・地域社会における女性の活躍～女子大学における教育の使命～……30
（国際女性デー記念シンポジウム）

地域との連携活動

・祇園新橋景観づくり協議会……31
・弥栄自治連合会　～すこやか学級～……32
・京都洛東ロータリークラブ　創立30周年事業
・七條大橋をキレイにする会

企業・自治体・学校との連携活動

・酒づくり体験……33
・京都市中央卸売市場
・KWU小学生プログラミングコンテスト開催……34
・小学生対象の英語イベント
◎履修証明プログラム

大学・研究機関との連携活動

・奈良女子大学との連携……35
・奈良先端科学技術大学院大学との協定
・京都府立医科大学との協定
・武庫川女子大学とのSDに関する協定
・京都の女子大学から全国の女子大学へ
東京に集う女子大学連携のためのキックオフミーティング開催……36
・京都アメリカ大学コンソーシアム（KCJS）との交流会

2017年度主な活動実績……37

京都女子大学地域・産学官連携ポリシー……39

はじめに

京都女子大学 地域連携研究センター長 竹安 栄子

京都女子大学地域連携研究センターAnnual Report 2017をお届けします。

2015年10月に地域連携研究センターが発足して以来、さまざまな学外機関との交流が盛んになりました。その過程で、行政や企業、市民との連携活動を教育課程の中に取り込み、体系的な学びとして京都女子大学の教育に活かしていきたいと考えていた時に、京都市の本事業の募集が計画されていることを知りました。

京都市「学まち連携大学」促進事業の第1の目的は、連携活動を教育課程の中で展開することにあります。本学がめざしていた方向性と一致していたため、早速、学長の下にワーキンググループを立ち上げ検討に入りました。

幸い本学の申請した「地域系女子養成プログラム（副専攻）の構築――地域社会を支える女性リーダーの養成をめざして――」が京都市によって採択され、2016年10月から事業が始動しました。

本事業は、そのタイトルから理解されるように、地域社会のリーダーとして活躍する女性人材の養成をめざすものです。子育てや高齢者支援、子どもの教育、環境・景観保全問題、さらには地域振興など、地域社会には女性の生活領域に深くかかわる課題が山積しています。この解決に向けて、地域では多くの女性が様々な形で活動しています。一例を挙げると、ボランティア活動の参加者は、女性1,634万人に対して男性は1,361万人（国立教育政策研究所H25）です。その一方で、リーダーの多くは男性よって占められています。例えば、NPO代表の女性割合は22.5%、小中学校のPTA会長は12.5%、町内会長は4.5%にすぎません（平成28年版内閣府『男女共同参画白書』）。女性にとって暮らしやすい地域社会を創るためには、女性もリーダーとして地域社会で発言し、行動することが求められます。このような考えから、本事業では、地域の諸課題を女性の視点で発見し、自ら解決する実践力と組織力を備えた女性人材の養成をめざしています。

本事業は、①連携志向型教育プログラムの構築、②正課内外での連携活動の展開、③「京都ネットワーク協議会（京女ラウンドテーブル）」の組織化、の3つの事業から成り立っています。連携活動を教育課程の中に取り込むことによって、地域社会と連携活動に関する基礎知識、および地域社会の課題発見に必要な専門知識を修得し、社会の中で様々な構成員とともに課題解決をめざす実践活動を行う、という一連の過程を体系的に学べるプログラムを構築しました。このプログラムの根底には、大学という教育機関でこそ実施できる連携活動を構築したいという思いがあります。学生が、連携活動の実践を通して、自らも社会の構成員の一人であり、暮らしやすい社会を創るには主体的に活動する必要があるとの当事者意識を学んでほしいと期待しています。

「女性地域リーダー養成プログラム」の設置

共通領域の中の『教養科目』の一部として開講されていた企業による寄附講義6科目（2016年度4科目、2017年度、2018年度に各1科目新設）に加え、2017年度から導入科目である「連携活動入門」と「地域連携講座」（2科目）が始まりました。「連携活動入門」では、連携活動の社会的意義や連携活動に従事するに当たって心得ておくべき倫理事項など基本的な知識を学びます。「地域連携講座」では、本報告書3頁から紹介していますように、連携先となる地域社会の多様な側面の理解をめざしています。「地域連携講座B2（京都の社会と連携活動）」は、京都市を事例として、地域社会が多様な機関から成り立っていること、そしてそれぞれの機関が大学生の協力を期待していることを学んでもらうことを目的としています。授業は、本学の連携先を中心に学外機関からお迎えした実務家による講義で構成されています。

『女性地域リーダー養成プログラム』は連携活動を、単に「活動」に終わらせるのではなく、体系的な教育課程として構築することを教育目的として、2019年度には副専攻とする予定です。

「学まち推進型」連携活動補助事業（連携プロジェクト）の始動

連携活動の全学的展開を促進するため、2017年に公募型「学まち推進型」連携活動補助事業（連携プロジェクト）を学内教職員に向けて募集しました。その結果、4学部から9件の応募がありました。活動の内容は、「子育てと高齢者支援」、「安心安全・まちづくり支援」、「京都・東山の歴史と文化」、「京都の産業支援」のすべての領域に及んでいます。2018年3月には活動成果を、本学連携先の関係者の皆さんや学内者の前でご報告しました。本報告書の9ページから「学まち推進型連携活動補助事業」に掲載していますのでご覧ください。

連携活動の広がり

この1年間で新たな連携活動がいくつも誕生しました。授業にゲストスピーカーとしてご登壇いただいたのもその一つです。「地域連携講座」には、本学と包括協定を結んでいただいている京都市内の12の機関から授業を提供していただきました。東山区中小企業家同友会の企業家が複

数の授業で体験にもとづいた講義を学生に聞かせてくださいました。ハイアットリージェンシー京都のミリアム・バロリ総支配人の英語講義は、学生に大きな感銘と励ましを与えてくれました。

ユニークな活動としては、京都アメリカ大学コンソーシアム(KCJS)との連携活動があります。KCJSは、米国アイビーリーグの大学生を対象とした日本研修の指導機関です。KCJSと京都女子大学の学生が、授業で共通テーマを巡って日本語で討論したり、京都女子大学の学生が日本語会話のパートナーとなってKCJSの日本語教育をお手伝いしています。本学の学生にとっては居ながらにして海外の大学生との交流を体験できる貴重な機会となっています。

本事業がスタートして1年6か月が経ちました。短い期間ではありますが、様々な学外機関と連携関係を結ぶことができました。また本事業の中核である連携志向型教育プログラム「女性地域リーダー養成プログラム」を、全学生が受講できる共通領域の中に立ち上げることができました。しかしながら連携先等との具体的な活動はまだ端緒についたばかりです。連携活動は、異分野間の交流によって、予想されなかったような展開が生じるところに面白さと利点があります。本事業が完結する2年後には多彩な活動が展開されていることと思います。どうぞご期待いただきますとともに、京都女子大学の連携活動になお一層のご協力ご支援を賜りますようお願いいたします。

女性地域リーダー育成プログラム

〔2018年度予定〕

開講期間	科目名	担当	対象学生
前期・火2	連携活動入門	竹安栄子	大学1回生～
前期・火3	地域連携講座B1（地方自治体の取り組みを学ぶ）	各地方自治体(中道 仁美)	大学2回生～
前期・月2	地域連携講座B2（京都の社会と連携活動）	京都市・京都市の企業及び団体(竹安 栄子)	大学2回生～
後期・水2	産学連携講座A1（持続可能な社会の実現を果たす民間金融機関の役割）	株式会社三井住友銀行(寄附講義)	大学1回生～
後期・木4	産学連携講座A2（基礎知識としくみの理解）	野村證券株式会社(寄附講義)	大学1回生～
後期・金4	産学連携講座A3（民営鉄道事業と地域社会）	阪急電鉄株式会社(寄附講義)	大学1回生～
前期・火5	産学連携講座B1（新聞を通じて現代社会の諸問題について理解を深め、社会に対する問題意識を養う）	株式会社朝日新聞社(寄附講義)	大学2回生～
前期・金2	産学連携講座B2（エネルギーを通して見る社会変化と環境対策）	大阪ガス株式会社(寄附講義)	大学2回生～
前期・水2	産学連携講座B3（女性が働くということ・働く者の権利を学ぶ）	連合京都・京都中小企業家同友会東山支部・京都信用金庫(寄附講義)	大学2回生～
通年・集中講義 初回4月11日㈬	連携課題研究	桂 まに子	大学2回生～
通年・集中講義 初回4月11日㈬	連携課題研究	京都信用金庫(寄附講義)	大学2回生～

「学まち推進型」連携活動補助事業（連携プロジェクト）一覧

〔2017年度実績〕

	テーマ	担当	連携先	イシュー
1	馬町空襲の歴史を学び語り継ぐ取り組み	文学部史学科 教授：坂口 満宏	修道自治連合会、馬町空襲を語り継ぐ会	③京都・東山の歴史と文化
2	京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ“ワクワク工作キャラバン	発達教育学部 児童学科 教授：矢 野　真	京都刑務所	②安心安全・まちづくり支援
3	乳幼児期の子ども・子育て支援実践と支援者養成 –京都女子大学親子支援ひろば ぴっぱらん	発達教育学部 児童学科 准教授：瀬々倉 玉奈	市内保健センター、児童館	①子育てと高齢者支援 ②安心安全・まちづくり支援
4	現代のライフスタイルに合った綴織の商品開発	家政学部 生活造形学科 准教授：青木 美保子	綴織技術保存会・秦絲綴苑	④京都の産業支援
5	京都の糸の新たな可能性	家政学部 生活造形学科 准教授: 渡邊 敬子	株式会社フジックス、ジャスミン	③京都・東山の歴史と文化 ④京都の産業支援
6	東山区における　町内会運営の現状と防災活動に関する調査研究	現代社会学部現代社会学科 准教授：奥井 亜紗子	京都市東山区役所	①子育てと高齢者支援 ②安心安全・まちづくり支援
7	「東山に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト報告	現代社会学部 現代社会学科 准教授：森 久　聡	京都市（京都市在住の女性や京都市内勤務の女性）	③京都・東山の歴史と文化
8	京女まち歩きオープンデータソン	図書館司書課程 講師：桂　まに子	京都市東山図書館、オープンデータ京都実践会、まちづくりカフェ@東山	③京都・東山の歴史と文化

※4つのイシュー:①子育てと高齢者支援②安心安全・まちづくり③京都・東山の歴史と文化④京都の産業支援

（女性地域リーダー養成プログラム）

「地域連携科目」を共通領域に開講

2017年度は、全学部を対象とした8科目が開講された。2018年度はさらに3科目を追加して開講する予定である。また、2017年度は6県の担当者による講義であったが、2018年度は11県に増える。

連携活動入門：連携活動事始め～連携活動にチャレンジ～

授業の概要

連携活動に従事するにあたって、知っておくべき基礎的な事項や身につけておくべき倫理事項、さらに多様な連携活動の実態について講義する。
なぜ今、連携活動が社会的に求められているのか、大学生がさまざまな連携活動に従事することの意義が何なのかを、具体的な事例を交えながら講義する。
受講期間中、1度は学外での活動に参加する。活動先は、地域連携研究センターの連携先を中心に紹介するので、安心して参加できる。

授業の計画

1. オリエンテーション
2. 連携活動とは?—なぜ今、求められているのか。
3. 地域社会の仕組み1—多様な概念
4. 地域社会の仕組み2—地域社会の構造
5. 人口減少社会と地域社会の課題
6. 地域社会としての京都1—現状と課題
7. 地域社会としての京都2—京都の町内会
8. 京都女子大学の連携活動
9. 多様な分野の連携活動
10. 企業に求められる社会的責任
11. 連携活動に必要な倫理的配慮
12. 連携活動の実践1
13. 連携活動の実践2
14. 実践体験報告
15. 全体のまとめ

地域連携講座B1：地方自治体の取り組みを学ぶ

授業の概要

大学が就職協定を締結している行政の担当者から各県の現状と施策を学び、地域社会の担い手として女性が果たす役割の重要性を理解する。
地方自治体が直面する課題を自ら発見し、解決に当事者意識をもつようになることが期待される。
11の地方自治体の担当者が授業を担当し、授業ごとにコメントペーパーを課す。

授業の計画

1. イントロダクション:オリエンテーション:授業の進め方
2. 広島県:仕事も暮らしも。欲張りなライフスタイルの実現
3. 石川県:石川で働く京女OGが本音で語る
   石川県の幸せのカタチ
4. 岡山県:「晴れの国おかやま」の就職支援施策
5. 鳥取県:鳥取発の地方創生～子育て王国とっとりの挑戦
6. 滋賀県:滋賀から世界へ、世界から滋賀へ
   ～琵琶湖の経験を活かした水環境ビジネスで世界に貢献
7. 滋賀県:ほどほど田舎、ほどほど都会の滋賀ぐらし
   ～滋賀で暮らす　滋賀で働く～
8. 静岡県:静岡県の持つポテンシャルを活用し「ふじのくに」を活性化しよう!
9. 静岡県:住んでよし、働いてよしの静岡県
10. 山口県:「山口県の魅力について」
11. 香川県:早わかり「うどん県」
    ～全国一小さな県の大きな魅力～
12. 徳島県:「地方創生」の“成果”結集・好循環に向けて
13. 福岡県:県民幸福度日本一をめざして
    ～福岡県の雇用情勢とUIJターン就職支援について～
14. 福井県:ふくいの魅力を発見!「ふくい講座」
15. 総括:地方の課題と女性:レポート作成

地域連携講座B2：京都の社会と連携活動

授業の概要

行政や企業、各種組織の実務担当者をゲストスピーカーとして招き、それぞれの分野からみた京都の社会や産業の実態を講じてもらうオムニバス形式の授業。京都市の姿と京都市が直面する課題を多角的視点から理解し、かつ課題解決に向けて学生自身が地域貢献活動に主体的に取り組むよう学生の行動を促進することを目的とする。

授業の計画

1. イントロダクション（竹安）
   本講義の概要や目的など受講に当たって理解しておくべき事項について解説する。
2. 京都市の姿と課題（京都市役所）
   京都市の概要と大学生の連携活動の実態について解説する。
3. 東山区の姿と課題（東山区役所）
   東山区の特徴や概要と京都女子大学の学生が携わっている地域連携活動について説明する。
4. 京都の景観まちづくり（NPO法人京都景観フォーラム）
   京都の魅力的な町並みや風景を、受け継ぎ守り育てる地域の人達と、それを支える行政やNPOなどの、最前線の取り組みについて学ぶ。
5. 共生社会をめざして（京都市立東山総合支援学校）
   京都における特別支援教育の歩みを辿るとともに、現代社会において「障害」とは何なのかを考える。また、総合支援学校の教育活動について、児童生徒や保護者の視点に立つ試みを通して理解を深め、共生社会の形成をめざす主体者としての素養を養う。
6. 「負の回転ドア」を考える（京都刑務所）
   京都刑務所における受刑者の実情と社会に貢献する刑務官の姿を通じて更正支援について考える。
7. 「社会復帰に向けて」の課題と支援（京都保護監察所）
   社会復帰に向けての実態をしり、社会としての課題、必要とされる支援について考察する。
8. マスメディアから見た京都（朝日新聞社）
   日々報道を続ける記者の視点で、京都を巡る現状や課題などを、取材現場の話しを交えながら学ぶ。
9. 京の台所をささえる（京都市中央卸売市場）
   市民の台所を支える中央卸売市場の仕組みと役割を理解する。
10. 京都の酒（招徳酒造）
    伏見の酒造りの伝統と、酒造産業が抱える課題を解説する。
11. 京都の観光（ハイアットリージェンシー 京都）
    ホテル業界の視点から京都の観光について話をするとともに、地域の一企業として東山区の観光振興に果たす役割について学ぶ。
12. 京都の経済と金融1（京都銀行）
    地方銀行の役割や、京都銀行の概要および女性の活躍推進に関する仕組みについて説明し、今後の自身のキャリアについて考察する機会とする。
13. 京都の経済と金融2（京都銀行）
    京都銀行の地方創生や地域活性化への取り組みについて、具体的事例や最新の動向を解説する。
14. 京都の企業（本学就職部長・京都ジョブパーク）
    大学生の就職指導にあたる立場から、京都の多様な企業の実態について解説する。
15. 総括（竹安）
    全体のまとめ

受講者の感想（コメントペーパーより抜粋）

視野が広がった、具体的な就職活動へのイメージができたなど授業を評価する感想が多くみられた。

・京都の美しいまちは、行政だけでなく市民により保護されていることがわかった。（家政学部3回生）

・京都は観光、サービス業で産業が成り立っていると思っていたが、意外にも製造業が1位を占めていることは知らなかった。伝統的なモノづくりをしていた企業が最先端企業となっていることを知り、興味深く思った。（文学部3回生）

・1回目の授業から、本当に色々な角度で京都について知ることができてとても有意義だった。京都の企業の良い面を知ることができ、就職の視野にいれたいと思った。（現代社会学部3回生）

産学連携講座A1：株式会社三井住友銀行（寄附講義）

持続可能な社会の実現を果たす民間金融機関の役割
～持続可能な社会の実現のために、民間金融がその幅広い事業領域を活かして果たすべき役割について学ぶ～

授業の概要

三井住友銀行及びそのグループ会社での事業内容を素材にしながら、これらの様々な事業の仕組みを解説するとともに、今後の社会生活や資産形成に必要となる知識を習得する。
社会人である各社の講師の考え方や京都女子大学OGの経験談を通じて、金融業務の幅の広さや面白さを理解するとともに、働くことについて また、自身の今後のキャリアについて考える機会とする。

授業の計画

1. オリエンテーション
2. 金融業界について
3. 三井住友銀行の業務①銀行の3大業務
   当行各部の業務内容紹介①
4. 三井住友銀行の業務②当行各部の業務内容紹介②
   京都女子大学OG講話
5. 身近なお金の話 人生の3大資金
   ライフプランについて
6. 証券会社って?
   証券会社の業務内容と金融商品の基礎
7. 身近なお金の話 万が一が起こった際のお金
   遺言信託とは?
8. 信託って?　信託銀行の業務内容紹介
   超富裕層と信託
9. これまでのまとめ 重要ポイント解説
10. 運用とは?
    資産形成を考えるための「はじめ」の知識
11. リースって何? 身近なリース商品とその役割
12. 色々なカードについて
    クレジットカードの利便性と注意点
13. ローンについて　ローンとの上手な付き合い方
14. 三井住友銀行の最新の取組 ITを活用した取組
15. 総論 まとめ

産学連携講座A2：野村證券株式会社（寄附講義）

基礎知識としくみの理解

授業の概要

資本市場に求められる役割とは何か。激変する日本の資本市場の全容と投資のリスク&リターンの考え方、株式投資・債券投資・ポートフォリオ運用・外国為替相場など証券投資における重要なテーマを実務の観点から解説する。

授業の計画

1. ガイダンス
2. ライフプランニングとNISA
3. 経済情報の捉え方
4. 金融資本市場の役割とその変化
5. グローバル化する世界と資本市場の果たす役割
6. 証券投資のリスク・リターン
7. ポートフォリオ・マネジメント
8. 株式市場の役割と投資の考え方
9. 債券市場の役割と投資の考え方
10. 外国為替相場とその変動要因について
11. 投資信託の役割とその仕組み
12. 資本市場における投資家心理
13. 日本の株式市場史
14. 産業発展と投資の考え方
15. まとめ

産学連携講座A3：阪急電鉄株式会社（寄附講義）

民営鉄道事業と地域社会

授業の概要

阪急電鉄グループの事業内容を素材に、事業の起こりや時代背景、事業の仕組み等についての解説を加えながら、地域や市民生活にどのように関わり、その発展に寄与してきたかを説明する。また、現役の社会人である講師の考え方や経験談を通じて、「仕事をする」ことの奥行きの深さや面白さに触れることで、自身の今後のキャリアについて考える機会とする。

授業の計画

1. 阪急沿線について
   現在の阪急沿線の紹介
2. 鉄道業界における民営鉄道の特徴と小林一三
   沿線の開発と様々な事業への取り組み
3. マルーンカラーと阪急らしさ
   阪急電車の特徴、神戸線沿線の発展
4. 梅田の発展
   梅田“阪急村”、ターミナルデパート、エリアマネジメント
5. 街の発展と駅・鉄道
   駅の工夫、街における駅の役割、立体交差化事業
6. 駅の利便性
   駅ナカ・駅ソト小売事業、広告事業
7. 西宮北口の発展
   「関西で住みたい街No.1」のなりたち、阪急西宮ガーデンズ
8. 小林一三とレジャー事業
   宝塚歌劇、遊園地、プロ野球
9. 宝塚歌劇の発展と地域との共生
   宝塚大劇場、ベルばら、手塚治虫
10. 阪急沿線における住宅事業
    分譲住宅地の開発から都心型マンションまで
11. 街におけるホテルの役割
    地域のランドマーク的役割から宿泊特化型ホテルまで
12. 事業組織の運営・管理
    本社部門の業務
13. 子育てしやすい社会・街づくり
    学童保育事業への取り組み、女性の働き方
14. 社会貢献活動
    社会貢献プログラム「ゆめまちプロジェクト」
15. これからの阪急@京都
    事業の企画、仕事への活かし方

産学連携講座B1：株式会社朝日新聞社（寄附講義）

新聞を通じて、現代社会の諸問題について理解を深め、社会に対する問題意識を養う

授業の概要

現役の新聞記者が様々な社会問題をテーマに複数回、講義をする。学生はそれぞれの意見を小論文として提出。講師が全員分を添削し講評する。また、当日の新聞を使って社会の問題を考える。なお、ニュースの動向などにより、授業計画を変更することがある。

授業の計画

1. メディアの特徴、新聞の役割、記者活動とは
2. 新聞の読み方、各紙比較
3. 文章の書き方①（作文作成）
4. 文章の書き方②（作文講評）
5. 記者講義①貧困問題
6. 小論文作成（800字、60分）
7. 小論文の講評、議論
8. 記者講義②難民問題
9. 小論文作成（800字、60分）
10. 小論文の講評、議論
11. 記者講義③労働問題
12. 小論文作成（800字、60分）
13. 小論文の講評、議論
14. 読者投稿欄「声」編集長講演
15. 政治と選挙、世論調査

産学連携講座Ｂ２：大阪ガス株式会社（寄附講義）

エネルギーを通して見る社会変化と環境対策

授業の概要

ガス・電気の基礎知識（ガスの輸入先や供給方法）、国のエネルギー施策、時代の背景等についての解説を加えながら身近なエネルギーから環境問題、社会情勢について考える機会とする。

授業の計画

1. 関西のガス事業の歴史
2. 都市・地域・住まいとエネルギー
3. 天然ガスの調達について
4. 世界における天然ガス利用等の概況（小テスト）
5. 都市ガスの製造と供給の概要
6. ガス事業者による保安の取組み
7. 大阪ガスのDNAと家庭用機器開発
8. ガス事業者のPR戦略（小テスト）
9. 日本のエネルギー政策について
10. ガス事業者の電力事業の概要について
11. 温暖化対策に向けた世界の動向と日本の政策
12. ガス事業者の温暖化対策の取り組み
13. 住まいとエネルギー
14. コミュニティーと文化
15. エネルギー会社と地域共創（小テスト）

産学連携講座Ｂ３：連合京都・経済同友会・京都信用金庫（寄附講義）〔2018年度開講〕

働く女性のための基礎講座

授業の概要

労働組合や企業、各種組織の実務担当者をゲストスピーカーとして招き、それぞれの分野からみた働くことに必要な基礎知識について学ぶ、オムニバス形式の授業である。働くことについての課題を多角的視点から理解し、かつ課題解決に向けて学生自身が主体的に取り組むよう学生が考え行動する主体性を促進することを目的としている。

関連科目：「連携活動入門」「産学連携講座A1」「産学連携講座B1」「産学連携講座B2」

授業の計画

1. イントロダクション 担当教員と連合京都橋元会長
   橋元会長を招き、本講義の概要や目的など受講に当たって理解しておくべき事項について、担当教員とともに解説する。
2. 労働組合の歴史と連合の取組み
   連合本部から講師を招き、働く人の権利を守る活動について学ぶ。
3. 労働者の権利を知る
   連合京都から講師を招き、労働者の権利について基礎的な用語や労働法について学ぶ。
4. 雇用形態別の働き方
   連合京都から講師を招き、正規と非正規の処遇の違いを理解する。
5. 働き方改革
   連合本部から講師を招き、法改正の動向や連合の果たす役割について学ぶ。
6. 男女平等、WLB、ハラスメント対策
   連合京都から講師を招き、イキイキと働くための基礎知識を学ぶ。
7. 金融・小売業の職場の課題
   金融・小売業の現場から講師を招き、産業の特色の職場の状況について理解をする。
8. 教育・保育、公務員の職場の課題
   教育・保育や公務員の現場から講師を招き、各職場の特色について理解する。
9. 京都の労働者の状況
   連合京都から講師を招き、京都の労働者や労働相談の窓口の実情を知る。
10. 金融業
    京都信用金庫から講師を招き、地方金融業の役割について理解する。
11. 金融で働く
    京都信用金庫から講師を招き、地方金融業で働くことについて理解する。
12. 地域の中小企業
    東山中小企業同友会から講師を招き、地域に密着して経営を継続する中小企業の実情について理解する。
13. 女性経営者の働き方
    東山中小企業同友会から講師を招き、女性経営者の働き方について学ぶ。
14. ヤングハローワーク
    連合京都から講師を招き、オール京都の体制で取り組まれている若者の就労支援の実情について理解する。
15. 全体のまとめ
    担当教員による総括

連携課題研究：〔2018年度開講〕

地域連携課題を発見し、情報技術を用いた問題解決策を考える

授業の概要

本授業では、受講生が地域社会の担い手となることを想定し、地域で様々な仕事や活動を行う上で必要となる社会との関わり方や、地域の情報を収集・整理・編集して正確に発信する技術力を身につけることをめざす。具体的には、これまでに学んだ地域および企業との連携の課題を整理し、プロジェクトテーマを設定し、とりわけ情報技術を活用した問題解決について考察する。

テーマに沿った情報収集や現地調査、地域の関係者へのインタビュー、編集・発信の成果は研究レポートにまとめる。デジタルな地域情報の編集には、「Wikipedia」と「OpenStreetMap」の2種類を予定している。最終プレゼンテーションはできるだけ公開形式にし、学生同士および連携先の方々との意見交換を行う。連携・協力先として、京都市内の図書館や企業、商店、寺社などを予定している。

授業の計画

1. オリエンテーション
   Problem Based Learningについて
2. 地域や企業との連携課題について整理する
   ディスカッション
3. プロジェクト準備
   連携課題テーマの設定、情報収集
4. Wikipediaを用いた地域情報の編集・発信について
5. OpenStreetMapを用いた地域情報の編集・発信について
6. プロジェクト設計
   ミニプレゼンテーション、ディスカッション
7. プロジェクト実行
8. プロジェクト実行
9. プロジェクト実行
10. 中間報告
    ミニプレゼンテーション、ディスカッション
11. プロジェクト実行
12. プロジェクト実行
13. プロジェクト実行
14. 研究レポートの作成
15. 最終報告・意見交換
    最終プレゼンテーション、ディスカッション

※1～6は前期期間中に実施し、7～14は夏休み期間に実施する。
最終報告は10月中を予定している。
※スケジュールの詳細は初回授業時に提示する。

連携課題研究：京都信用金庫（寄附講義）〔2018年度開講〕

女性起業家と考える、「創業しやすい京都」

授業の概要

この授業は、本学の連携先である京都信用金庫の寄附講義で実施される。京都で活躍する女性起業家との対話や、事業の見学・体験といったフィールドワークを通じて「京都で創業するうえでの課題」を発見し、「創業しやすい京都」とはどのようなものかを考察する。最終授業では、京都信用金庫関係者及び女性起業家に対して成果をプレゼンテーションし、意見交換を行う。

学習においてはダイアログやワークショップなど、チームでの課題研究やプレゼンテーションを重視する。なお、京都信用金庫の女性職員もチームに加わり共に学習を行う。

授業の計画

1. オリエンテーション
   ～本講義の流れについて～
2. 京都信用金庫における創業の取組
3. 集中講義① 京都における企業の実例
4. 集中講義① 京都における企業の実例
5. 集中講義① 京都における企業の実例
6. 集中講義① 京都における企業の実例
7. 集中講義②
   事業所訪問による発見課題とソリューションの中間発表
8. 集中講義②
   事業所訪問による発見課題とソリューションの中間発表
9. 集中講義②
   事業所訪問による発見課題とソリューションの中間発表
10. 集中講義②
    事業所訪問による発見課題とソリューションの中間発表
11. 集中講義③ 起業家への提案発表
12. 集中講義③ 起業家への提案発表
13. 集中講義③ 起業家への提案発表
14. 集中講義③ 起業家への提案発表
15. 最終報告
    創業しやすい京都

馬町空襲の歴史を学び語り継ぐ取り組み

③京都・東山の歴史と文化

連携先：修道自治連合会、馬町空襲を語り継ぐ会

文学部 史学科 教授 坂口 満宏

1 事業の概要－その発端と目的について

1945年1月16日、米軍のB29が京都に飛来し、馬町周辺に250ポンド爆弾を20発投下、多くの民家と当時の京都幼稚園や京都女子専門学校の寮などが大きな被害を受けた。

こうした馬町空襲の歴史を風化させてはならないとして、2012年1月、修道自治連合会協賛のもと、「馬町空襲を語り継ぐ会」(以下、語り継ぐ会)の母体が組織され、空襲の碑建立事業が始まった。そして2014年1月16日、京都市立東山総合支援学校の敷地内に「馬町空襲の地」の碑が建立され、毎年、献花追悼式典が開催されるに至った。2016年1月には式典に参加した村中修氏より、氏の祖父にあたる故村中秀光が空襲の数日後に撮影したとされる12枚の写真が語り継ぐ会の関係者に贈呈され、新たな資料の発見だと、にわかにわき立った。しかし、その一方で関係者の高齢化もあって、2018年1月に開催される献花追悼式典をもって最終回としようではないかとする案が浮上してきた。

語り継ぐ会の取り組みが終わりを迎えようとしている。京都女子大学の学生が主体的に地域の歴史を学び、馬町空襲の歴史について語り継ぐ基礎を作ることはできないだろうか。新たな空襲被害写真が発見された。既存の写真と組み合わせることで、これまでにない資料集を作ることはできないだろうか―。こうした問題関心から「写真に見る京都・馬町空襲被害地図」の作成事業は始まった。そしてその成果を多くの人たちに知ってもらうため、2018年1月9日～27日にかけて空襲被害写真を本学図書館のギャラリーウォールにて展示するとともに、1月16日には最後となる「馬町空襲の地」碑前での献花追悼式典で発表することにしたものである。

2「写真に見る馬町空襲被害地図」の作成過程

本事業は正課の授業として取り組まれたもので、2017年9月から2018年1月までの毎週金曜日の4講時、S306演習室にて文学部史学科3回生配当の日本史演習IBの受講生17名とTAの大学院生1名、それにゲストスピーカーの参加を得て実施された。「写真に見る馬町空襲被害地図」(以下、被害地図)の作成作業は、大きく3つのステージをもって展開された。

第1ステージは、文献・写真・フィールドワーク・聞き取り等の実践を通じて、ともに馬町空襲当時の状況を理解する段階である。

まずは学生たちを6つのグループに分け、文献学習として『東山タイムス』第59～61号に掲載された回顧記事「京女史口伝」の読み込みを通じて、第三小松寮と京都幼稚園の被害状況の把握につとめ、ついで写真資料の分析に進み、立命館大学国際平和ミュージアムより提供をうけた14枚の写真(長谷川哲也が撮影した写真に大野孝司が撮影方向を図示し説明したもの。以下、立命館写真)と村中秀光が撮影した12枚の新発見写真(以下、村中写真)との照合・分類作業をおこなった。そして学生たちとともに写真と地図を片手に、爆撃で焼失した家屋はどこにあったのか、大八車や大きな樽が写っていた街並みは今どうなっているのか、逆卍の刻まれたお地蔵さんの祠は今も残っているだろうかと路地裏を探索するフィールドワークに出た。

その間に別途編成した聞き取りチームは、空襲当時、京都幼稚園に通っていた嶋本勢津子氏へのインタビューの準備を進め、その過程で嶋本氏の手元に空爆前の幼稚園の園庭と建物を写した写真(以下、嶋本写真)があることが判明した。嶋本写真が発見されたことで、爆撃前の幼稚園と爆撃後のそれを撮影した村中写真との対比が可能となり、二つの写真を並べることで、どの建物がどれほど吹き飛ばされたのかが一目でわかるようになった。

第2ステージは、パンフレットに掲載する写真を厳選し、それぞれに115文字以内で的確な解説文をつける取り組みである。学生たちにとって、この作業は思いのほか難しいものであったようである。文献学習や聞き取り調査は、情報の収集すなわちインプットによるものだが、この解説文の作成という作業とは、ただ単に他人の文章を写せばいいというわけではなく、自分たちで分析した結果を自らの言葉で表記し、アウトプットしなければならない。しかもその文章は印刷され、多くの人々に読まれるものになるとあっては、間違ったことは書けない。名前も明記されるので責任も伴う。これは大変な作業だとプレッシャーがかかったからである。

実際に演習ではダメ出し、書き直しの連続であった。爆撃で倒壊した家屋の写真を見て「多くの瓦礫が散乱している」と記載したグループに対しては、一括りに瓦礫というがそれは木材なのか瓦なのか、木材の場合それは梁の一部なのか壁が崩れ落ちたものなのか、もっとしっかり分析してみよう…と、写真から判読できる情報を明確な用語で表記することが求められた。また、光のあたり方や影の形、傾きから撮影された時刻と方角がわかるはず。しっかり推定してみよう…と、一般の文献史学の研究方法にとどまらない分析力が求められていた。

こうした議論を重ねて完成したのが「伝えたい記憶写真に見る京都・馬町空襲被害地図」である。写真の色調補正とレイアウトとにおいては、写真家・原寛氏の協力を得た。配布するパンフレットとしてはA3サイズ二つ折り両面印刷

のものを4,000部、同内容のB2サイズパネルを6部作成した。

第3ステージは、図書館1階ギャラリーウォールでの写真・パネル展示と馬町空襲の碑前で開催される献花追悼式典での成果発表である。

2018年1月9日㈫～27日㈯のうち、日曜日を除く17日間、京都女子大学図書館交流の床1階ギャラリーウォールに設置されている2台の展示ケースにA4サイズに引き伸ばした写真と解説文、壁面にはパネルを4枚、それに修道自治連合会から提供された「馬町空襲爆弾の破片」を展示した。ケースには、村中修氏による「馬町空襲写真について」と題された寄稿文と村中秀光が撮影した空襲写真のネガフィルムの実物と保存ケースを収めた。

パネル展示については多くのマスメディアによる取材があり、1月9日のWEB版『烏丸経済新聞』でいち早く報じられ、翌日には『京都新聞』『毎日新聞』で、12日には『朝日新聞』(いずれも朝刊の京都市内版)で大きく報道された。同内容の記事は各紙のWEB版でも配信された。

2018年1月16日㈫午後3時、京都市立東山総合支援学校敷地内の「馬町空襲の地」碑前にて修道自治連合会・馬町空襲を語り継ぐ会主催による第5回「馬町空襲 献花追悼式典」が開催された。参加者はおよそ80名。このうち50名余りが京都女子大学の学生(その内訳は被害地図の作成にあたったゼミ生が12名、他は日本史特殊講義2の受講生)であった。献花追悼式典の後、被害地図の作成にあたった学生が碑の前で自らが担当した写真と地図について解説を加え、総合司会者が図書館で開催されているパネル展への参観を呼び掛けて発表を終えた。

この式典と学生たちが作成した被害地図の説明の様子については、当日のNHK京都「京いちにち」、同「ニュース845」、KBS京都「newsフェイス」で放送され、1月17日にはケーブルテレビのJ:COM京都「デイリーニュース京都」でも取り上げられた。『読売新聞』『京都新聞』『毎日新聞』『朝日新聞』の各紙朝刊(京都市内版)には、語り継ぐ会の方と本学の学生による献花の写真とともに学生たちによる被害地図作成の意義が掲載された。

図書館の展示会場では名簿やアンケートの記載を求めなかったため、正確な来場者数についての把握はできていない。A校舎の門衛所で受付を済ませた学外者についてのみ集計可能なデータがあるが、受付を通らずプリンセスラインのバス停から直接図書館へ向かった方も多数いたと思われる。門衛所で受付を済ませた来場者の合計は139名であった。10名以上の来場者があった日を挙げると1月16日16名、17日14名、18日17名、19日11名、22日12名となった。テレビや新聞の報道を見て今回の企画を知り、大学まで足を運んでくれたものといえる。また、京都女子大学附属小学校6年生のクラスでは、事前学習した後にパネル展を見学したとして、33人がその感想をまとめてくれている。1月19日には2名の教師に引率された京都女子中学校・高校の生徒35名の来場があったという。

展示会場の入り口には、自由に持ち帰ってもらうようにとパンフレットを1500部平置きにしておいた。パネル撤収時に集計したところ、その残部は366部であった。本事業で作成したパンフレットならびに展示写真、さらにはマスメディアによる報道記事の写し等については「馬町空襲を語り継ぐ会」のホームページに掲載されている。ご参照願いたい(http://vinaccia.jp/umamachi/)。

2018年1月9日～1月27日
ギャラリーウォールでの展示

2018年1月11日の一般来場者と
J:COMによるビデオ取材

2018年1月16日　「馬町空襲の地」碑前での学生による写真パネル説明

3 今後の課題について

今回の成果に関しては、概ね好意的な評価を得たといえるが、いくつかの不備も指摘されている。その一つは、写真の出典を青赤緑の三色で区分したが、写真10-Aの青色枠線が印字されていなかったこと。二つ目に、地図に不可欠な縮尺と方位記号が示されていないこと。三つ目には、妙法院前側町西側や大谷本廟北側の通妙寺付近にも爆撃があったが、その場所について今回の地図には表示できていなかったことである。これらについては改訂版を作成することで修正をはかっていきたいと思う。

京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ“ワクワク工作キャラバン”

②安心安全・まちづくり支援

連携先：京都刑務所

発達教育学部 児童学科 教授 矢野　真

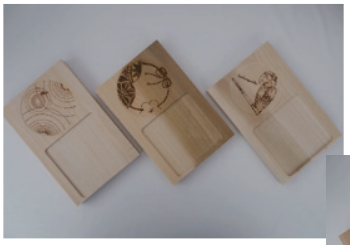
開催場所：第40回京都矯正展（京都刑務所）
日　　時：平成29年10月21・22日の2日間
21日㈯:10:00～16:00、22日㈰:10:00～13:00
内　　容：①学生のデザインによる木のトレー制作（先着100名）
②日本産の木材を使ったお箸づくり（先着100名）
参加学生：矢野ゼミ3・4回生と2回生。21日20名、22日20名

実施の背景と目的

京都女子大学と京都刑務所の連携協定を受け、「木育」を中心とした造形ワークショップを行っている発達教育学部児童学科・造形（矢野）ゼミでは、京都刑務所内の作業所で作られる、子どもが使用する木工玩具のデザインを通して連携を行うこととなった。そこで、連携の第一歩として、平成28年10月22・23日開催の第39回京都矯正展において、造形ワークショップ“ワクワク工作キャラバン”を実施した。“日本産の木材を使ったお箸づくり”をテーマとして開催した結果、200名を超える参加者があり、両日とも終了時間を待たずして材料がなくなってしまうといった盛況のうちに終了することができた。

この昨年度実施した“ワクワク工作キャラバン”は、京都刑務所との連携1年目ということもあり、造形ワークショップ単体での活動となった。本来は、造形ゼミへの依頼の際、「木育」をテーマとした京都刑務所内の作業所でつくられる、子どもが使う木工玩具のデザインの提案、及び刑務所が主催する「社会を明るくする運動」行事に造形ワークショップを企画することが連携の主体であったため、造形ワークショップにおいても大学（学生を中心）と京都刑務所、そして地域住民のよりよい連携を考えることが必要であるという改善点が挙げられた。

そこで今年度の連携では、木のトレーを学生がデザインし、デザインをもとに受刑者が木地をつくる。その木地を使用して造形ワークショップを行い、地域住民に作品づくりを楽しんでもらうといった内容の検討を行い、実施した。刑務所での材料・加工経費が予想以上にかかったこともあり、木のトレーとなる木地を100個のみ、刑務所で加工してもらうこととなった。予算とは別に桜と檜の箸づくり用の材料も用意し、トレー終了後の対応に備えた。



学生がデザインした木のトレー

実施内容

台風接近の影響もあり、地域住民の参加者の来場がどのくらいかといった不安はあった（実際に22日は時間短縮）が、両日とも用意した材料がなくなり、その心配は払拭された。

〈実施1日目・21日〉

実施にあたり、木のトレーを1日50個×2日間で計算していたが、翌日の天候の問題もあったため、用意したトレー100個を先着順に、終了した後は日本産の木材を使ったお箸づくりへと変更した。“木のトレーづくり”は用意した鉋（かんな）や鋸、木工やすりを使って角を丸める、自由に落とすなどして、最後に紙やすりを使って仕上げるといった工程である。

木工やすりで角を取る

鉋で角を落とし、紙やすりで仕上げる

実施1日目、14時過ぎには100個用意したトレーはなくなってしまったため、残りの時間は“日本産の木材を使ったお箸づくり”に切り替えた。無料ということも影響し、参加者は多く、楽しく制作に取り組んでいる様子を窺うことができた。参加した学生たちも、普段接する子どもだけでなく、大人との世代間コミュニケーションを楽しんでいる様子が窺われた。

箸づくりを楽しむ様子

完成した箸作品

〈実施2日目・22日〉

台風接近のため、時間を短縮しての開催となった。前日からの“日本産の木材を使ったお箸づくり”を行った。参加者は、普段手にすることのない箸づくり用の鉋を使用することが楽しかった様子で、制作の工程を考えると、トレーづくりよりも箸づくりの方がつくる手ごたえがあったことが窺われ、盛況であったように思われる。

実施による成果

今回の「矯正展」における造形ワークショップ“ワクワク工作キャラバン”では、大学（学生）と刑務所（受刑者）、そして地域住民の3者の構図が理想的なかたちで実現できたと考えられるが、予算との関係もあり、十分な材料調達ができなかったことは確かである。

しかし、普段は接することのない刑務所の受刑者と“作品を通してコミュニケーションを図る”ことは、地域との連携を考えることはもちろんのこと、造形に自信を持った保育者の育成という視点からも、児童学科が役割を受ける大変重要な連携であったと考えられる。

そこで、子どもを中心とした造形ワークショップを実践する保育者志望の学生に焦点を当て、その有効性について検討した。本報告では概要について報告する。

今回の対象は、昨年度の参加がなく両日参加した3回生11名とし、「矯正展」における学生たちの学びについて、造形ワークショップ終了後に学生から提出された報告書の分析を行った。

ここでは、実践の目的に対応し、記述の特徴を以下の視点で4つにカテゴリー化した。

a. 京都刑務所、矯正展についての印象
（造形ワークショップの背景）

実践以前は、ほとんどの学生が京都刑務所や矯正展についてのネガティブなイメージが強く、内容や参加者についての予想ができずに不安を感じていたことが窺われた。しかしながら、実践によってその不安が解消され、活動を楽しむことができたことが窺われた。

b. 造形ワークショップにおける受刑者の理解
（造形ワークショップの背景）

造形ワークショップを通して、受刑者（京都刑務所の木工部）の活動について理解し、さらにそれを参加者にも理解して欲しいという意見がみられた。また、造形ワークショップによる共通の作品との関わりを通して、受刑者と学生や参加者とのつながりを実感できていることが窺われた。

c. 木のトレーのデザインについて（学生自身の造形活動）

学生自身のデザインに関して、参加者にデザインの好みには個人差があることを感じ、そこから相手の視点に立つことの重要性が認識されていた。また、参加者がデザインに興味を持ったり、参加者から認められたりすることに喜びや充実感を感じていることが窺われた。

d. 参加者、造形ワークショップの感想（参加者の活動と支援）

造形ワークショップを通して参加者とかかわった感想として、まず、活動の効果として学生と参加者、親子、参加者同士など、様々なコミュニケーションが生まれたことが挙げられたこと、また、そのなかで学生がコミュニケーションへの支援を行うという役割を持っていたという記述もみられた。参加者の造形活動に関する気づきとして、磨いたり削ったりする活動や、道具の扱い方についての特徴への気づきが挙げられ、また、匂いや手触りなど、素材の持つ特性についての気づきも挙げられていた。さらに、参加者への支援のあり方や反省点として、交流を促す関わり、道具の安全な使用、参加者に合わせた環境や制作過程などが挙げられていた。

まとめ

実践の報告書からもわかるように、学生は「木育」による教材の作成や保育への応用、そして様々なコミュニケーションなど多くのことを学び、自己の技能や意識を向上させている様子が窺われた。今後もこの連携を継続的な活動として、刑務所・地域への理解、連携を通した学生の意識向上、そして「木育」の大切さについて検討していく必要があろう。

現代のライフスタイルに合った綴織の商品開発

④京都の産業支援

連携先：綴織技術保存会　奏絲綴苑

代 表：家政学部 生活造形学科 准教授　青木 美保子

1. 本プロジェクトの背景にある問題と趣旨

京都の染織産業は伝統型地場産業であり、そこには長い年月をかけて培ってきた世界に誇れる染織技術が存在する。日本固有の繊細な手織技術、時代を超えて受け継ぐ紋様・色彩を表現する染色技術は、今なお京都の職人の技に息づいている。しかし、生活者のライフスタイルの変化にともない和装産業が低迷傾向にあるなか、存続が危ぶまれる技術が多くなっているという現状もある。本プロジェクトで対象とした綴織もその技術のひとつである。

綴織は西陣織のなかでも機械化が難しい織技術で、それだけに匠の技で時間をかけ丁寧に作られた綴織は、少量生産の高級織物として位置づけられているが、現在その需用は、技術を伝承する職人の育成を阻むほどに減少している。加えて、綴織を目にする機会が少ない今日では、それがどのような織物なのかさえ知らない若者も増えている。綴織の技術は、京都、延いては日本の無形の財産であり、このような実情にあって、この技術の保存は、急務の課題と言える。

そこで、本プロジェクトでは、家政学部生活造形学科学生有志をメンバーとして、綴織技術保存会　奏絲綴苑と協力して、綴織が身近なテキスタイルとなるよう、現代のライフスタイルに合った商品の提案をおこない、綴織の知名度の向上と需用の拡大をめざした。

2. 活動メンバーおよび役割

・綴織技術保存会　奏絲綴苑:当会は、伝統工芸士　平野喜久夫氏が代表を務め、若手の職人もメンバーとなって、綴織の技術を保存するために活動している会である。本プロジェクトでは、西陣織爪掻本綴織の技術提供および商品企画監修をおこなっていただいた。

・本学家政学部生活造形学科有志（大学院修士1回生　和田梓、4回生　井川　益来、村田　祐実、1回生　谷脇　里沙、松井美樹）:デザイン提案、試作および、一部の商品制作をおこなった。

3. 活動内容

3-1 工房見学とキックオフミーティング

6月1,2日、綴織技術保存会奏絲綴苑を、2班に分け2日間にわたり訪問し、綴織の作品と技術を見学し、その特徴を理解した。6月21日には、京女メンバーのミーティングで、商品開発に向け活動計画を立てた。6月28日、全体ミーティング（奏絲綴苑メンバー6名が来訪）をおこない、京女メンバー各自がマーケティングリサーチの報告と綴織を使った服飾雑貨やファッション商品のデザイン画をもってプレゼンを行い、続いて、技術的な問題点、可能性等について奏絲綴苑メンバーから意見をいただき、試作に向けディスカッションをおこなった。

3-2 商品開発・イベント出展

以下のように、綴織を使った服飾雑貨やファッション商品開発を目的として、商品を制作して二つのイベントに参加し、綴織を使った商品に対しマーケティングリサーチをおこなった。

①京都アートフリーマーケット 出展(図1)

月日：10月7-9日　会場：京都府京都文化博物館

活動内容:夏休み中、ファッション雑貨の制作を課題とし、工房の方と共同で試作から完成までの作業をおこない商品を制作し(図2)、9月の出展に向けた準備を経て、「京都アートフリーマーケット」に出展した。そこでは、マーケティングリサーチをおこない、リサーチで得た情報をフィードバックして、次の商品企画に反映させる取り組みをおこなった。なお、広報用チラシも学生が主体となって作成した(図3)。

図1　京都アートフリーマーケット出展ブースの様子

図2　制作商品

図3　広報用チラシ

成果と課題：色鮮やかな商品によって華やかなブースとなったこと、産学共同の出展ということもあって、立ち止まってみてくださる方は多かったものの、値段が高いということ、また綴織がそれだけの価格になるだけの価値があることに対する認知度の低さが明らかとなった。

②藤花祭 出展（図4）

月日：11月2-4日

会場：本学B校舎エントランス

活動内容:京都アートフリーマーケットで得られた学び「価格設定」と「綴織の認知度の低さ」の問題を踏まえ、正課外活動推進補助事業「京都の伝統染色産業と学生のデザインコラボレーション」と合同で出展して、それぞれのブースで、新たな商品を発表した。価格の問題に対しては、綴織の端布を使用したアクセサリーを開発し、低価格での販売を

図4 藤花祭出展　B校舎エントランスの様子

実現した。また、認知度の低さの問題の改善策として、綴織の紹介ビデオの上映に加え、奏絲綴苑の織機を借用・設置して、伝統工芸士による実演と体験コーナーを設けた。尚、当イベントでの売上金は奏絲綴苑にお渡しし、今後の学生提案による商品開発へ充当していただくこととした。このような方法で循環継続型の活動となることをめざしている。

3-3 商品開発・イベント出展の成果と波及効果

2度のイベント参加をすることで、リサーチで得た情報をフィードバックして商品企画に反映させることができ、また、多くの方々に伝統の染織工芸の魅力を伝えることができた。

開発した商品のマーケティングを目的としてフリーマーケットに参加した波及効果としては、モノづくりに取り組む多くの出展者たちとの交流が生まれ、学生も連携先メンバーも、これまでにない学びを得ることができた。

3-4 イベント企画「伝統を繋ぐプロジェクト報告会 & 新たなビジョンに向けた交流会」

今年度の活動報告と、来年度の新たなものづくり活動に向けて、日本の伝統や文化を今に伝え続ける企業やそこに関わるアーティストとの交流をはかることを目的として、正課外活動推進補助事業「京都の伝統染色産業と学生のデザインコラボレーション」と合同で、イベントを企画・実施した。以下、その詳細である。

日時：2月9日　14：00～18：30　会場：以下4か所

【見学会】

◆DECO JAPAN（京都市中京区堺町通御池下ル 丸木材木町680 - 3）

見学の視座：伝統の染織技術を現代の服飾に活かしたデザイン

内容：日本のデザインを京都から世界に発信し、日本の感性を活かした確かなモノづくりに挑戦するDECO JAPANのデザイナー菅井英子氏のギャラリーを見学した。

◆千總ギャラリー & SOHYA TAS

（京都市中京区三条通烏丸西入御倉町80番地 千總ビル2F）

見学の視座：京友禅の歴史と伝統を活かしたものづくり

内容：京友禅の老舗として日本の文化、デザイン、アート、ファッションを追求する千總がこれまでに蒐集した染織品や絵画作品を展示する千總ギャラリーと、現代ならではの様々なものづくりを展開し発信するSOHYA TASショップを見学した。

◆着物ギャラリー&アトリエ善

（京都市中京区 西洞院通姉小路上る三坊西洞院町561）

見学の視座：現代の和装と着物図案

内容：京友禅、京小紋、西陣織を中心にトータル・コーディネイトで提案する三善工芸株式会社のギャラリーを見学し、現代の着物、和装小物に加え、歴史資料の着物図案を拝見した。

【報告会&交流会】

◆バターリングラム（京都市中京区柳水町76）

内容：事業報告及び新たに関わる方々との交流をおこなった。報告会には、DECO JAPANの菅井英子氏、着物ギャラリー&アトリエ善オーナー小林重之氏をお招きした。事業報告として、①綴織技術保存会 奏絲綴苑との活動、②山元染工場（ケイコロール）との活動、③株式会社マドレーとの活動、（①は本プロジェクト、②③は正課外活動推進補助事業「京都の伝統染色産業と学生のデザインコラボレーション」の取り組み）について、代表の学生がプレゼンし、その後、国内外さまざまな場所で活躍する音楽家AKI-RA sunriseも交えて交流会をおこなった。

4. まとめ

長い年月をかけて培ってきた京都の染織技術の多くは、職人の手技術によって時間をかけて少量生産されたものであり、高級製品化の道筋を辿ってきた。今回の試みは、現代の衣生活への商品提案であり、大量生産と低価格化が進む服飾商品市場のなかで、いかに差別化を図った商品の提案をすることができるのかが課題点となった。プライスゾーンについても同様に、染織技術の価値を落とすことなく商品として市場に認められる価格設定について模索を繰り返した。また、伝統技術職人と服飾を学ぶ学生がともに商品を考案する際には、技術に対する職人の考え方とアパレルの視点での感性の違いによる商品化への難航もあった。

今後もここで得た学びを基に、職人と学生が互いの意見を尊重しつつ、市場に広く打ち出していくことのできる商品開発を続けていきたい。そうすることで、伝統の染織技術伝承の一助になれば幸いである。また、活動の歩みや成果について公表できる場を多く持つことにより、多くの方々に興味を持っていただき、伝統の染織文化・和装文化の継承へとつなげたい。

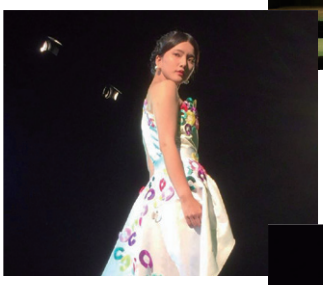
京都の糸の新たな可能性

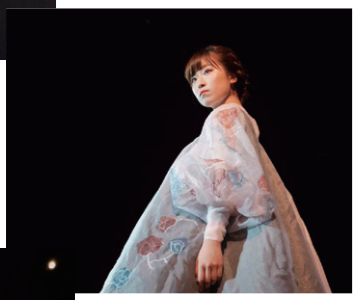
③京都・東山の歴史と文化　④京都の産業支援

連携先：株式会社 フジックス、ジャスミン

家政学部 生活造形学科 准教授 渡邊 敬子

京都には長い歴史と文化が息づいている。「シャッペスパン」というポピュラーなポリエステル糸は、短繊維の中でも『シルクシステム』と呼ばれる絹紡式で紡績され特に、強くて、美しく、縫い良い糸として定評がある。この糸はまた、合成繊維でありながら美しい色調に特徴がある。この発色を可能にする背景には、京都・西陣で絹糸を染めてきた染色の伝統文化や技術がある。この糸の発色・強さなどの特徴は、単に縫い糸としてだけでなく、ファイバーアートなど広い分野に活用できる可能性を秘めている。また、同社の絹糸・ロックミシン糸などシェアは高く、ミシン刺繍用の糸や特殊な糸が豊富にそろっている。工業用の糸もかなりのシェアがあり業界でもよく知られた存在である。しかし、一般の人は糸の商品名は知っているが、社名を知らないなど、社名そのものの知名度はあまり高くない。また、家庭での裁縫離れなどにより、糸の性質や品質についても知識が低下してきている現実がある。そこで、製造元の㈱フジックス(京都市北区平野宮本町5番地)と本学のアパレル同好会twinkleのコラボレボレーションで、作品の制作・展示、ショー、そしてワークショップなどを行い糸の用途や新しい可能性をみつけ新たな形で発信しようと試みた。





1. twinkle Summer Show

6月25日㈰ロームシアター京都・ノースホールにて、アパレル造形同好会twinkleが初めて学外でSummer Showを開催した。Summer Showは例年学内で行われていたもので、今年はtwinkleの活動を外部の人に見て欲しいということでホールを借り外部で開催した。参加者は、代表の生活造形学科2回生の宮野瑠奈さんをはじめ、生活造形学科の学生を中心とした1から3回生72名である。「糸」「Frill」「Classy」「Dolf」の4テーマに分かれて、59点の作品が披露された。来場者は約300人と盛況であった。代表の宮野さんはショーを振り返って「Summer Showは1つのテーマに絞らず、チームごとにやりたいことを表現した。各チーム試行錯誤を繰り返しながら本番へと向かうことで、確実に成長できたと思う。運営の面でも、会場のスタッフや大学関係者の方々に助けられ、なんとか本番を迎えることができた。今後、twinkleが活動していく上で、学外でのショー開催は良い経験となった。フジックスの糸を使用したオープニングの衣装製作では糸の表現方法を模索する中で、各自のデザイン傾向を発見したりなど、新しい自分の一面を覗き見ることができた。また、糸が持つ可能性をより感じる機会となり、糸への興味が増した。」と語っている。写真は本体の用途を超えた糸の使い方を考えて制作した作品である。このように課題を持って取り組むことで、学生ならではの新しい発想で取り組んだ結果、クリエイティブな作品を作ることができた。

2. 大学生を対象としたワークショップ

twinkleの学生を中心としたワークショップを7月6日に本学の教室で開催した。講師はフジックスの営業部の方々が担当された。参加学生は25名で、目的は糸の用途や性質を理解することで、これをきっかけに他の用途への応用を考えることを目的とした。まずはバック作りで、メルターという糸でフェルトやリボンなどを仮止めして、装飾を施した。メルターは、熱接着糸で縫製合理化のにない手として、研究開発された、熱接着性の合繊糸で、接着縫製は縫製の省力化と能率向上の新しい分野を受け持つ技法として注目されている。しつけや 待ち針の代わりに、“仮接着”して縫い合わせたり、裾まつりなどに利用すれば、形良く整い、美しくかんたんに仕上がる。次に、キングスターマルチカラーという糸で、ミシンの刺繍を施した。2～3cmごとに色が変化する段染め糸なので、簡単なステッチで見栄えがする。同系色のグラデーション、明るい多色糸ライトマルチ、シックな多色糸のダークマルチの3タイプを各8色ずつのカラーバリエーションがあり、それを選ぶのもたの

しかったようだ。さらに、今流行しているタッセルをサラで作った。上品な光沢をもつ手ぬいステッチ糸であるが、サラサラとした手触りとシルクのような上品な光沢をもつ太番手の手縫いステッチ糸で、色あせにくく、タッセル作り応用ができ、これを結ばなくても巻いて引っ張るだけでとまる糸「ノットノット」でまとめることで手間のかかるまとめの作業を簡単にすることができた。

参加した学生たちは、特殊な糸で作業効率が上がることや美しい色合いの糸があることを知り、その応用をそれぞれが考え、実りあるものであった。さらに、ここで学び、考えたことをオープンキャンパスの高校生を対象にしたワークショップに応用することにした。

3.高校生を対象としたオープンキャンパスでのワークショップ

8月5日のオープンキャンパスで30人×2回の計60名に対してフジックスの糸を使ったワークショップを行った。糸はフジックスから提供を受け、バック本体については、裁断や持ち手付など先日のワークショップに参加した学生がすべて準備を行った。また、当日も前回のワークショップに参加した20名の学生が高校生の制作を手伝った。高校生も大学生同様、糸の面白さを知りおどろきと興味を持っていた。また、大学生と高校生で話し合い、交流をする中で新しい工夫も生まれた。

4. 1回生に対する糸の基礎知識の授業

1月16日本学の1回生に対して、フジックスの技術開発者から縫い糸・手縫い糸の基本的な知識の講義をした。講義後は、縫い上りの良し悪しと縫い糸と摩擦の関係、色の選択など専門的な知識についての質問が出た。学生は、実習の課題だけでなくて衣装などの制作を行うため様々な生地や素材を取り扱うようなときにどのような観点でどの糸を選ぶべきかなど真剣に学んでいた。

今回の取り組みでは、学生が糸を知ること、その性質を利用してモノづくりを行うことを中心とした。この中で、企業の方も学生の発想を興味深く感じてくださっており、これからもこのような活動を継続することで、学生の発想の豊かさなどの能力をさらに引き出したい。今回の取り組みをきっかけに今後も交流を続けて企業側の販売促進や知名度アップにつながるような展開にしたいと考える。また、企業のブログや株主への説明資料に取り上げることなどの面でも企業にはメリットもあったようだ。

乳幼児期の子ども・子育て支援実践と支援者養成

–京都女子大学 親子支援ひろば ぴっぱらん–

①子育てと高齢者支援　②安心安全・まちづくり支援

連携先：市内保健センター、児童館

発達教育学部 児童学科 准教授 瀬々倉 玉奈

はじめに

児童学科では過去10数年間にわたり地域と広く連携しながら、音楽隊、木育キャラバン、人形劇フェスティバル、こどもひろばなど多岐に渡る活動をおこなってきた。

さらに2016年度からは、京都市の「学まち連携大学」補助事業の助成を受け、2014年度に新築された児童学科U校舎に「子育て支援ルーム（U101）」として用意されていた真新しい空間を構成することからスタートする機会に恵まれた。まずは、学科内の4領域（後述）から代表者を選び、子ども・子育て（のちに「ぴっぱらん」）ワーキング・グループを立ち上げて頻繁に相談・検討を重ね、定期的に学科会議でも審議してきた。

2017年度には、学内外の多くの方々の協力のもと、実際の親子支援プログラムを考案し、以下の2形態を実施した。①親子分離によるクローズド・グループの連続講座と、②「こども広場」における子育て支援ルームの開放である。いずれも大変好評で、今後の継続を強く望む声が寄せられた。児童発達学・表現学・文化学・保健学という多様な専門領域の教職員や学生から成る児童学科ならではの親子支援が、現在展開されつつある。本稿では今後の大学における親子支援活動の参考となり得るよう、時系列的にその過程をふり返ることとする。

1. 開設準備の開始：2016年度

活動を開始するにあたって、以下のコンセプトをもとに準備を進めた。

①未就園児とその保護者とを対象の中心にすること。
②家庭ではなかなか経験できない豊かな遊び体験を提供すること。
③子どものみならず、保護者にとっても意味のある体験を提供すること。
④豊かな親子関係をつむぐことに貢献すること。

以下は上記のコンセプトにもとづいて揃えられた良質な玩具などの概要である。

〈木製の家具と玩具〉まず、木製のテーブルや椅子などをできるだけ広く利用できるよう、2歳児の体格に合わせて誂え、乳児には専用のフロアーマットを用意した。次に、木製でCEマークを取得しており、食品衛生法に基づく検査をクリアしたものにこだわって、乳幼児の心身の発達を考慮し、玩具類を1つずつ丁寧に選んでいった。具体的には、ラトル（ガラガラ）、積み木、おままごと道具、パズル、汽車とレール、引き車や手押し車などである。あわせて、学科内の宝箱（?）から、クーゲルバーンなども発掘した。

〈多様な玩具や材料〉家庭では難しい感覚・感触遊びを経験できるように、蜜蝋のクレヨンや、口に入れても安全な指絵の具、洗い流せるクレパスやマジック、ベタベタするのり、幼児用のはさみ（左利き用を含む）や様々な紙類を用意した。さらに、ミニマラカスやトラベルカホンなどの楽器類、絵本や指人形なども揃えた。また、設定によって移動できる身体遊び用の大型遊具なども設置した。

〈衛生面の配慮〉上述した乳児専用のフロアーマットには、使用の度に洗濯できる布カバーを用意した。また、眠ってしまった子どものためにタオルケット類にもこだわり、スイスの認証機関であるbio.inspecta（バイオインスペクタ）が認めたオーガニックコットン使用の物を選んだ。さらに子ども用のトイレについて、靴から履き替えられるよう親子用のスリッパを用意し、できる限り感染源が拡がらないよう配慮した。

2. 親子支援に関わる環境整備と支援の開始：2017年度

(1) キャンパスの親子支援に関する環境アセスメント

3、4回生の複数の講義において、沐浴やオムツ替え実習で使用されてきた乳幼児人形（実物大）を抱っこひもなどを使用して抱き、学内でロールプレイイングを行った（図1）。子どもや保護者の目線で歩くと、危険な箇所が複数見つかったため、施設課に児童学科から報告し善処を依頼した。あわせて、初めて来室する親子にとって、どこに案内表示が掲示されていれば分かりやすいかについても考えた。この親子支援に関する環境アセスメント活動には、実に約130名にものぼる学生が関わった。

図1 赤ちゃん人形と学内を歩く

(2)「京都女子大学親子支援ひろば ぴっぱらん」：ニックネーム・テーマ曲・手遊び歌・キャラクターの創作、壁面飾り・案内表示：前期

親子支援活動を児童学科全体で展開するために、子育て支援ルームとその活動のニックネームを募集した。子どもにも親しみやすく、音やリズムが面白く、かつ、意味のあるものを検討した結果、「京都女子大学親子支援ひろば ぴっぱらん」と名づけられることとなっ

図2 キャラクター

た。「ぴっぱらん」とは、本学の建学の精神を抱合している、お釈迦様が悟りをひらかれたとされる菩提樹=ピッパラ樹から変化させたオリジナルの言葉である。

これに伴って、ハート型のピッパラ樹の葉を元にキャラクターを創り(図2.前川.2017)、さらに、音楽のICT教育を専門とする教員の指導のもと、4回生が卒業研究としてテーマ曲を作曲(和田.2017)し、乳幼児の音楽教育を専門とする教員の指導のもとでは、ぴっぱらんの手遊び歌などが創作された。さらに、ツイッターによる情報発信(ぴっぱらんツイッター.2017-)も開始した。また、全学年に渡る多くの学生が、壁面飾り(図3)や上述のアセスメントによって掲示場所を考えた案内表示(図4)の作成に協力した。ぴっぱらんのコア・スタッフは、講義時間に加えて毎週3時間、プログラムの考案やその準備、練習などを行い、夏休みにかけては、複数の教員やゼミ生がリハーサルで親子役を演じたり、道具づくりをしたりと協力しあった。

図3 壁面飾り

図4 案内表示

(3)関連機関との関係づくり:夏期(学生の保育実習期間を含む)

京都市子ども若者はぐくみ局にチラシとポスターを持参して趣旨を御説明したところ、後日開かれる全区関係者会議にて案内して頂けることとなった。また、東山区子どもはぐくみ室、京都市子育て支援総合センターこどもみらい館、各児童館などにも活動開始のご挨拶にうかがった(遠方は郵送)。特に、東山区子どもはぐくみ室の皆様には、後日改めてお時間を頂戴し、東山区における子ども・子育て支援の現状や母子保健事業などについて、館内もご案内頂きながら丁寧に御教示頂いたうえ、ぴっぱらんについても貴重なご助言を頂戴した。さらに、複数の児童館にも直接うかがい、小松谷児童館では、直接親子にご説明する機会を頂いた。

(4)連続講座　ぴっぱらんシリーズの実施 2017年9月16日−10月7日(土曜日)

6組限定のクローズド・グループで親子分離を基本とした3回の連続講座を「ぴっぱらんシリーズ」と名づけて行った。一般的には、子どものために、必ずしも気が進むわけではない親子遊びをする、いわば「子ども支援」中心タイプか、保護者のための講座を行い子どもは単に託児に預けるといういわゆる「子育て支援」中心タイプが多く行われている。

しかしながら、ぴっぱらんシリーズでは、児童学科という特質を活かし、子どもにも保護者にも意味のある体験を提供するよう心がけた。実際のプログラムは以下の①〜③である。②の保護者を対象とした内容については、Yogaインストラクターの Yoo先生に依頼し、それ以外は、コア・スタッフの3回生7名に加えて、1、4回生、幼稚園教諭・保育士の大江と、臨床心理士の筆者が担当した。

図5 ①親子でねんど遊び

①親子合同:こねこね、ねりねり 〜こめこ かたくりこねんど〜(図5)
②子:3びきの子ぶたの大ぼうけん 〜からだ遊び〜
親:ヨーガ〜心とからだをほぐす(図6)
③子:ビリビリ、ペッタン
〜みの虫のお洋服づくり〜 (図7)
親:らくがきゲーム 〜子どもとこころをかよわせる手がかり〜

図 6 ②ヨーガ

図 7 ③みの虫のお洋服づくり

毎回アンケートを実施したが、紙面の都合上、詳細は別稿に譲る。3回の連続講座に対して、保護者6人全員が最も高い評価をしており、自由記述欄には、「親子分離にひかれて参加をしたけど、3回とも本当に楽しく参加して本当よかったです。(原文のまま)」といった、親子分離が申し込みのきっかけとなったことが分かる内容や、講座を通して同じ学生が同じ親子に関わったことへの感謝などが述べられていた。

(5)子育て支援ルーム(ぴっぱらんルーム)の開放:2017年11月3日・4日(終日.こども広場:学園祭期間)

毎年児童学科で開催し、同時並行で様々な企画が行われる「こども広場」において、2日間、終日、ぴっぱらんルームを開放した(図8)。約1ヶ月前に開催したぴっぱらんシ

図8 ぴっぱらんルームの開放

リーズのほぼ全組の親子が、祖父母や父親などの御家族を伴って来場された。2つのゼミ生が協力して見守る中、ぴっぱらんルームをホームベースとして、何度も出入りする親子や終日室内で過ごす親子も認められ、のべ100人程度が利用した。

3. おわりに

この2年間は、申請代表者が着任早々で、未だ、学内外の環境に慣れていないこともあり、多くの教職員や学生との協働関係を紡ぎながら、参加者にも意見をうかがい、手探り状態でのスタートとなった。この間、幼稚園教諭・保育士(大江)と臨床心理士(筆者)とのやり取りの多くを敢えてぴっぱらんのコア・スタッフの学生の面前に晒してきた。親子支援のキーワードである異職種間の「協働関係、コラボレーション」の生成過程の一例として、学び取ってもらえていれば幸いである。

年度内の親子支援活動が終了した後も、様々な学生によって、ぴっぱらんルームの充実化が続けられており、既に2018年度に向けて新たな企画も進んでいる。この2年間に、本活動に関わった学生数は、のべ300人を越えることとなった。

今後さらに、学科内、学内、そして地域の専門機関はもちろんのこと、地域の親子との連携・協働関係を深め、多様な専門家集団である児童学科ならではの親子支援を展開していきたい。

付記: ぴっぱらん活動への参加者に、写真の掲載の了承を得ている。また、この活動には細かな準備・学生の教育が必要であり、本学のFD活動予算なども合わせて使用し、児童学科の全教職員と多くの学生が参加しているが、会計上は明確に区別されている。

特に、大学研修員の大江文子氏には、玩具類の選定や関連機関の紹介、コア・スタッフの学生への指導など全面的にご協力頂いた。ここに記して感謝申し上げたい。

文献

京都女子大学親子支援ひろばぴっぱらん ツイッター(2017-)
https://twitter.com/jido_pipparan
前川由梨奈(2017)ぴっぱらんキャラクター
和田夏穂(2017)テーマソングの制作〜子育て支援ルーム「ぴっぱらん」〜.京都女子大学発達教育学部児童学科 平成29年度卒業研究抄録集 PP.147-148

東山区における

町内会運営の現状と防災活動に関する調査研究

①子育てと高齢者支援　②安心安全・まちづくり支援

連携先：京都市東山区役所、東山消防署

現代社会学部 現代社会学科 准教授 奥井 亜紗子

本企画の背景

本学が位置する東山区は高齢化率30%を超える都市型超高齢化社会である。筆者は2011年度より、東山区修道学区内の複数町内会において、町内会運営の現状や高齢者の生活実態を明らかにする学生実習（社会調査演習II）を継続的に実施してきた。実習プロセスにおいては、地蔵盆等を中心とした町内行事の堅調な出席率や、地域活動の主力としての団塊世代女性の活躍等が目立ったが、同時に高齢化のより一層の進行のなかで、地域社会の担い手不足がいよいよ顕在化し、町内会運営が転換期に直面している事実が明らかとなった。

一方で、この間、脆弱化しつつある地域基盤とは裏腹に、政策的には多方面に地域社会に期待をかける方向性が打ち出されている。その一つは地域包括ケアシステムであり、また一つは本事業で焦点を当てる地域防災である。

1995年の阪神・淡路大震災を機に防災における「地域」の重要性が再認識され、国による積極的な推進によって地域における自主防災組織の組織化が進んできた。京都市においては1999年度に自主防災会設置率100%を達成している。『消防白書』によると、自主防災組織とは、「地域住民の連帯意識に基づき自主防災活動を行う組織で、防災巡視、資機材等の共同購入等を行っており、災害時においては、初期消火、避難誘導、救出・救護、情報の収集・伝達、給食・給水、災害危険箇所等の巡視等を行う」組織であるとされている（総務省消防庁）。

この自主防災組織は町内会を基盤として結成されていることが多いが、上述したように町内会運営が転換期にある現在、地域防災のあり方もまた多くの課題を抱えていることが予測される。

企画の経過と今後の予定

本企画は、以上の問題関心に従って、町内会運営の現状や防災活動の実態を明らかにすることを目的として開始した。当初は東山区下11学区の町内会長を対象とした郵送調査票調査を予定していたが、関係諸機関との調整・相談の結果、計画を変更し、東山消防署の協力のもと自主防災部長を調査対象に切り替えた。自主防災部長は町内会長と兼任するケースが約8割を占めていることから（東山消防署聞き取りによる）、地域の防災活動や取組の実態や意見に関する項目と、所属町内会の現状を問う項目の二段構えの調査票を作成し、その関連性に焦点を当てることとした。本学は京都市の指定避難所となっており、自主防災活動の取組とその基盤である町内会運営の実態を知ることは、地域防災の拠点としての本学の果たすべき役割を考えるにあたって喫緊の課題といえる。

今熊野学区防災訓練：町名が書かれた幟を持って整列する地域住民の方々

自主防災部長を対象とした調査票調査は、2017年9月の自主防災会会長集会において、東山消防署より各自主防災会会長集会にて実施の告知を行い、2018年2月初旬より順次配布を開始している。春の火災予防運動に合わせて3月中の回収を予定しており、調査結果の分析と取りまとめは次年度秋頃を目途としている。

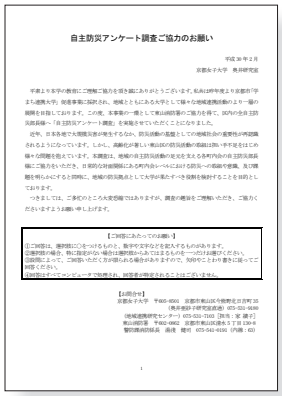
調査対象

東山区下11学区自主防災部長324名

調査票項目

地域の防災活動や取組について

- 自主防災部の結成単位
- 地域で行っている防災活動
- 災害時の避難所
- 災害の際に自主防災部長として感じる不安
- 地域の現状
- 民間避難所に対する意識
- 自主防災部長歴
- 自主防災部長の仕事に対する印象
- 災害に対する不安の度合い



自主防災アンケート調査ご協力のお願い

平成 30 年 2 月

京都女子大学　奥井研究室

平素より本学の教育にご理解ご協力を頂き誠にありがとうございます。私共は昨年度より京都市「学まち連携大学」関連事業に採択され、地域とともにある大学として様々な地域連携活動のより一層の展開を目指しております。この度、本事業の一環として東山地区等のご協力を得て、町内の全自主防災部長様へ「自主防災アンケート調査」を実施させていただくことになりました。

近年、日本各地で大規模災害が発生するなか、防災活動の基盤としての地域社会の重要性が再認識されるようになっています。しかし、高齢化が著しい東山区の防災活動の現状は問い中不足をはじめ様々な問題を抱えています。本調査は、地域の自主防災活動の充実を支える各町内会の自主防災部長様にご協力をいただき、日常的な地域環境にある町内会レベルにおける防災への意識や実態、及び問題を明らかにすると同時に、地域の防災拠点として大学が果たすべき役割を検討することを目的としております。

つきましては、ご多忙のところ大変恐縮ではありますが、調査の趣旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

【ご対応にあたっての心願い】

お二枚目は、個別回答につかるものと、数字や文字などを記入するものがあります。
回答時間の場合、特に設定がない場合は個別問いかあてはまるものを一つだけお選びください。
時間的によって、ご対応いただく方が難しい場合がありますので、別紙でこれら書きに従ってご対応ください。
お手数はイ・ンシュールで恐縮ですが、回答者が特定されることはございません。

【お問合せ】
京都女子大学　〒605-8501　京都市東山区今熊野北日吉町 35
（奥井研究室）研究室直通：075-531-9898
（地域連携研究センター）075-531-7103（担当：宮 建子）
東山保健所　〒602-8962　京都市東山区清水 3 丁目 139-8
電話連絡時間帯　曜日　時間　075-541-6161（内線：63）

1

所属町内会について

- 町内会長との兼任状況
- 町内会世帯数
- 町内会運営状況
- 町内の状態
- 町内会長の選出方法
- 町内の状況に対する意見
- 自由記述

フェイスシート・項目

- 年齢
- 性別
- 居住歴
- 仕事の状況
- 学区

「東山に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト報告

③京都・東山の歴史と文化

連携先：京都市（京都市在住の女性や京都市内勤務の女性など）

現代社会学部 現代社会学科 准教授 **森久 聡**

本プロジェクトの社会的な意義と学問的な可能性

日本を代表する伝統都市である京都・祇園新橋という「まち」を女性はどのように生きたのだろうか。戦後の日本社会は、高度経済成長・昭和・平成という大きな社会変動の波を経験してきた。そうしたなかで、女性の社会的位置づけも大きく変化している。本プロジェクトは、そのような「変化の時代」を生きた個人のライフヒストリーに焦点をあてることで、マクロな社会変動が具体的にどのような現実となってその個人の目の前に立ち現れるのか、を描こうとするものである。さらに都市社会学では伝統都市を対象にした研究蓄積はそれほど多くない。また女性という視点による研究も同様に少ない。そこで、本プロジェクトは女性・伝統という視点から「都市的なもの」を見いだしていこうとした。

また、このような地域の記憶を残していく試みは、近年ますます注目を集めている。地域の歴史を伝える様々な遺跡や文化財など物理的な財産だけではなく、記憶や語りといった無形の財産も意識的に残さなければ散逸する恐れがあるからである。しかしながら、地域社会を支えた人々の記憶が必ずしも残されるわけではない。地域社会は様々な個人が集合してお互いに響きあいながら生活をしていく。このように個人の人生経験に光をあてることで、これまで見えてこなかった祇園の別の顔を発見することができるのではないか。また、そうした別の顔はなかなか表に見えてこない姿であることも多く、そうした地域社会のもう一つの顔を記録していくことは、地域の記憶を残していくことにつながると思われる。

このように、このプロジェクトは祇園新橋を支えた人々の姿を浮かび上がらせることで伝統都市・京都の祇園新橋地区の「自画像」を描きなおすだけではなく、日本社会における社会変動と女性の社会的な位置づけも明らかにすることをめざしている。

本プロジェクトの教育的な意義

以上の調査プロジェクトは、学生にとって次の3つの側面において貴重な学習機会となる。1つは学生自身のキャリア教育である。本プロジェクトでは、インタビューを通じてひとりひとり一様ではない人生を送ってきた先輩女性と向き合うことになった。結婚・出産・子育て・仕事・介護など大きな節目を迎えた時に先輩達はどのような決断をしてきたのか。これら話をインタビューで聞くことは、これから社会に出てキャリアを積んでいこうとする学生にとって、自身の将来設計に大いに参考になったであろう。

2つ目は社会的な構造と具体的な現実問題とを往復運動する思考力の養成である。国内外の政治・経済・社会のシステムが複雑に絡み合って生じる現代社会の諸課題を理解し、解決するためには、社会システムの構造を理解するだけではなく、その問題がどのような具体的な現実となって生じるのか把握しなければならない。本プロジェクトでは現代社会が抱える諸課題や社会変動を座学で学ぶだけではなく、それらがローカルな地域社会と個人の人生において、どのように具体的な現実問題として現れてくるのかインタビューを通じて学習した。これらの経験を通じて、全体社会・地域社会・個人の3つの水準で現代の社会的な課題を考察・分析し、解決に向けた行動ができる能力の獲得につながることだろう。

3つ目に2回生で質的調査の経験を積むことで、翌年以降の社会調査演習や卒論に取り組む基礎体力をつけることができた。現代社会学部では典型的なアクティブ・ラーニング型の演習科目の1つとして社会調査演習を実施している。また社会調査演習を含めた社会調査関連科目を「社会調査プログラム」として位置づけ、社会調査のスキル獲得に力を入れている。社会調査演習は、社会調査のテーマ設定、調査計画の設計と実施、調査結果の分析と報告書の作成までを実施する実習科目である。そこで学ぶ社会調査のスキルは卒業論文の研究に取り組むにあたって、問題を設定し、解明するのに必要な情報を収集する（調査）、情報を整理し、加工する、新たな情報を生み出す（分析）、といった必須のスキルを身に付けることにつながる。このスキルを学ぶのが3回生開講の社会調査演習であるが、2回生の段階で予備的に経験することで、3回生での社会調査スキルの学習がより効果的なものになるだろう。

なお、この社会調査スキルは先に述べたような社会問題の解決に必要なスキルでもある。社会問題を解決するためには、正確な現状分析が必要不可欠であるが、社会調査スキルはそれを可能にする。

取り組みの経過

基本的には現代社会学部の演習科目である「演習2」（2回生後期）を拠点に一連の現地調査を実施した。まず教室で行う座学として、社会学の入門書として舩橋晴俊（2008）を講読し、インタビューによる聞き書き形式の都市社会学の岸（2014）を講読した。また、伝統都市としての京都に関する予備知識を増やすために、西尾（2014）および鯵坂・小松（2008）を講読した。これらの文献講読は他は全員で同じ課題に取り組んでいる。

また文献講読と並行して、以下の地域行事にも参加した。1つは祇園新橋地区で結婚式前撮り写真のマナーが問題

お火炊き祭り1

お火炊き祭り3

お火炊き祭り2

キャンペーン1

キャンペーン2

となっているため、地域連携研究センターと祇園新橋まちづくり協議会ではマナー向上キャンペーンを実施した。このキャンペーンに教員・学生が参加し、祇園新橋を訪れる観光客にマナー向上をアピールした。また、祇園新橋の伝統的な祭礼行事である「お火焚き祭り」にも参加し、のぼりの設置などの準備と後片づけなどを手伝った。このように地元文化を肌で感じる機会を増やすだけではなく、わずかな時間ではあるが少しでも地元住民との交流を重ねるようにつとめた。

以上の準備を経てインタビュー調査を実施するが、実施にあたっては履修者が12名であったため、3人一組で計4グループを形成してインタビューに取り組んだ。インタビューはいずれも祇園新橋周辺の場所で行われた。インタビューの時間は一人およそ1時間30分でなかには2時間ほどインタビューに応えてくださった方もいた。いずれの方も、はじめは緊張されていたが話し始めて緊張もほぐれると楽しそうに話をしていただいた。今回、インタビューに応じて下さった方は、祇園新橋地区の住民および商店経営者などである。小さな小料理屋を営んでいた方、老舗旅館の女将、出店して日が浅いコーヒーショップのオーナー、美容室を営んでいた方である。祇園新橋で生まれ育った方もいれば、祇園新橋にお店を出して数年という方もいて多様な方にインタビューすることができた。

インタビューから見えてきたもの

本プロジェクトの趣旨からすれば、わずか4人のインタビューでは言えることは少ない。それでも今後の本プロジェクトの展開を見据えて、仮説的にいくつか述べておきたい。

1つは祇園新橋といっても芸者だけの世界ではないということである。祇園新橋に生きる者がみな芸者の世界に関わっているわけではない。時には静かに酒と料理を楽しむ小料理屋も必要であるし、普段は洋髪の芸妓さんのためには美容室も必要である。もう一つは、先に言ったことと相反するが、そうは言ってもやはり祇園新橋は芸者のまちでもある、ということでもある。料亭（料理屋さん）あっての小料理屋であるし、芸妓さんのための美容室である。そして社会の表立ったところに顔を出すことは少ないが、元芸者の人が地域社会の要になっているともいわれている。この両者の関係をどのように描くかが今後の課題ではないかと思う。

そして祇園新橋の外部社会との接点も豊かである。この地域の家に嫁いできた人もいれば、たまたまこの地域に土地と建物を購入する機会に恵まれた人もいる。この地域に生まれ育ちながらもいったん外の世界に出て、外の世界で学んだことをもって戻ってきた人もいる。外部の人間でもある祇園新橋を訪問する客がもたらす影響も少なくない。その意味では祇園新橋は外部社会との関わりを保ちながら社会全体の変化の波のなかで存続してきた都市社会であって、都市のなかにある村社会（アーバン・ビレッジ）ではない。このことを具体的に示すことができれば良いと思う。

最後になるが、今回の事業実施にあたっては多くの方々にお世話になった。インタビューに応じていただいた方を始め、その家族の方々にもたくさんの心遣いをしていただいた。また地域連携研究センターのサポートなしに祇園新橋でインタビューすることはできなかった。本プロジェクトを支えてくれた多くの方に心より御礼申し上げる。

文献リスト

舩橋晴俊、2012、『社会学をいかに学ぶか』弘文堂
岸政彦、2014、『街の人生』勁草書房
西尾久美子、2014、『おもてなしの仕組み――京都花街に学ぶマネジメント』中央公論新社
鰺坂学・小松秀雄、2008、『京都の「まち」の社会学』世界思想社

京女まち歩きオープンデータソン

③京都・東山の歴史と文化

連携先：京都市東山図書館、オープンデータ京都実践会、まちづくりカフェ@東山

図書館司書課程 講師 桂 まに子

1. プロジェクトの目的

図書館司書の資格取得のための科目を持つ図書館司書課程では、「新しい図書館に対する展望を持ち、現状を積極的に改革できる人材」の養成に力を入れている。本学図書館司書課程を履修する学生が地域の図書館に就職することを想定し、当該地域に根差したサービスに従事する上で必要となる地域社会との関わり方や、地域の情報を収集・整理して正確に発信する技術力を身につけることが本プロジェクトの目的である。

本学が所属する京都・東山には魅力的な文化情報資源が豊富に存在する。既に有名なものがある一方で、ローカルに留まったまま広く知られていないものがあるのも現実である。特に、ウェブ上で信頼のおける客観的な情報を発信しているローカルな名所や名物はまだ少ない。図書館司書をめざす学生に限らず、東山で4年間を過ごす本学の学生たちが地域に興味を持ち、調べ、情報技術を駆使して編集・発信した東山の情報を卒業後どこにいても見える形で残していくこと（オープンデータ化）をめざす。

2. プロジェクト概要

2.1 オープンデータソンとは

オープンデータソンとは、「オープンデータ」と「マラソン」を組み合わせた造語である。本学の学生が在学中に京都・東山について関心を持ち、自ら調べ、まちを歩き、地域の情報を「Wikipedia」と「OpenStreetMap」を用いてオープンデータ化する活動を継続的に実践していきたいという思いを込め、「オープンデータソン」という用語をプロジェクト名に採用した。まち歩きオープンデータソンは京都をはじめ各地で開催されており、本プロジェクトの連携先団体である「オープンデータ京都実践会」はその中核を担っている。

2.2 事前学習

平成29年5月～平成30年2月にかけての通年プロジェクトとし、8月前半と2月前半にそれぞれ1日ずつ「京女まち歩きオープンデータソン」を開催した。これは試験期間後の時期を想定したもので、学期中を事前学習期間とし、東山区内でオープンデータ化したいエリアの選定やまち歩きコースの下見、寺社など名所の情報収集、図書館での文献調査、WikipediaやOpenStreetMapの技術習得を主に行った。前期に京女ポータルを通じて募集・開催したワークショップ&セミナー（6/21～6/24）には、図書館司書課程を受講する1～3回生がのべ30名参加した。8月のまち歩きエリアとコースの設定、Wikipediaの既存記事の確認、関連文献の収集、OpenStreetMapによる地図編集の基礎講習などを行った。初回ということもあり、エリアは京都女子大学周辺となった。

後期の事前学習は図書館司書課程の選択科目「図書館総合演習」の受講生9名（3回生）を中心に進めた。この科目は4回生で図書館実習を希望する学生が必ず履修する科目である。前期同様、エリア（粟田学区）を決定した後に事前調査を兼ねたまち歩き（粟田文学まち歩き）を企画し、コースの設定、寺社や商店などの情報収集と現地インタビュー、図書館での文献調査、OpenStreetMapの技術習得を行った。前期との違いは、エリア選定の際に元学区の存在に注目した点である。区内にある11の元学区を単位に地域情報のオープンデータ化を行えば、継続性のあるプロジェクトとして今後も取り組みやすい。折しも東山三条の金剛寺住職よりWikipediaの新規記事作成の依頼があり、学生がデジタルな地域情報を編集する教材にも適していることから、2月のオープンデータソンのエリアは粟田学区となった。

2.2 京女まち歩きオープンデータソンの実施

学期中の事前学習を踏まえ、2017年8月6日と2018年2月4日にまち歩きオープンデータソンを実施した。いずれも1日完結型の公開イベントとし、東山の「今」をデジタル情報で記録することに賛同いただいた学外参加者にも編集に加わってもらった。当日の午前中は外部講師からオープンデータについてのレクチャーを受け、午後は編集対象のエリアを2時間程まち歩きし、地域情報を積極的に収集する。8月はガイド（前東山区長）から、2月は会場となった金剛寺の住職と古川町商店街の関係者から歴史や名所、最新の動向についての説明を受けた。OpenStreetMapで地図を編集する参加者は、位置情報の記録および写真の撮影をするなど現地サーベイも行った。まち歩き後は会場に戻り、PCを用いた編集作業を2時間集中して行う。会場内に京都市東山図書館（8月）や京都府立図書館（2月）の協力を得て準備した関連文献（コピー含む）を並べ、主にWikipediaで記事を執筆する際の出典として活用した。Wi-Fi環境下で編集を行うため、テキストと画像（Wikipedia）、地図（OpenStreetMap）などのメディアを組み合わせてウェブ上で編集した成果は、即座にその場で世界中に発信され、参加者とも共有できる。これがオープンデータソンの醍醐味である。

2.3. 京女まち歩きオープンデータソン vol. 1

日　時:2017年8月6日(10:00〜17:00)

テーマ:豊臣秀吉と徳川家康の確執

ルート:京都女子大学(会場)〜新日吉神宮〜三十三間堂南大門付近の太閤塀〜京都国立博物館〜耳塚〜 豊国神社(大仏殿石垣等)〜方広寺の梵鐘〜大仏殿跡公園〜京都女子大学

参加者:17名(大学生5名、教員2名、ガイド1名、講師2名、一般参加7名)

Wikipedia編集(全て加筆修正)

・京都女子大学:誤字の訂正、リンクの整備。

・新日吉神宮:新規項目「新日吉神宮の境内の文化財」を追加。「狛猿 吽形」「狛猿 阿形」「樹齢500〜800年のスダジイ」の写真をアップロード。

・豊国廟:冒頭の段落に「阿弥陀ヶ峰の中腹には秀吉を祀る豊国神社が創祀されていた」を追記。出典追記。

・方広寺:「大仏殿跡緑地の入り口」の写真をアップロード。関連項目に「京の大仏」へのリンクを追加。

・京の大仏:「大仏殿跡緑地(方広寺)」の写真をアップロード。「造営の歴史」に「大仏殿の台座があったと考えられる場所は、大仏殿跡緑地として整備されている。」を追記。

・東山区:「馬町 空襲の地」の写真をアップロード。「歴史」に「*1945年(昭和20年)- 馬町地区が空襲に襲われる(京都空襲 | 馬町空襲)。」を追記。

OpenStreetMap編集

・京都女子大学、新日吉神宮:新図書館、鳥居、狛猿、大砲台、すだじい、トイレなど

・豊国神社:参道の灯篭14基、手水、公園、草地、観光案内板、大仏殿跡地公園

・耳塚:擁壁、記念碑、草地、情報掲示板、公衆電話、樹木

OpenStreetMapの編集は、領域(エリア)、線(ウェイ)、点(ノード)の3種類で行う。領域では建物や池、公園、庭園、駐車場、森などが描け、線では道路や川、壁、フェンスが描ける。点で描けるものは非常に多く、店舗や寺社、鳥居、石碑、お地蔵さん、自販機、トイレなどがその一例。

2.4. 京女まち歩きオープンデータソン vol. 2

日　時:2018年2月4日(10:00〜17:00)

テーマ:金剛寺と古川町商店街を正確に書く(描く)

ルート:金剛寺〜合槌稲荷神社〜古川町商店街〜金剛寺

参加者:20名(大学生5名、教員2名、講師2名、一般参加11名)

Wikipedia編集(全て新規作成)

・金剛寺 (京都市東山区五軒町)

・合槌稲荷神社

・古川町商店街

学生は「金剛寺」を担当し、新規記事を作成した。作業内容は、歴史、暫定文化財、所在地、交通アクセス、脚注、参考文献、関連項目、外部リンク、OpenStreetMapへのリンクなど。

OpenStreetMap編集

・金剛寺:名称、案内板、石碑、木々、境内の道、地蔵尊、墓、敷地の境界

・古川町商店街:通りの名称、各商店の名称・業種(ゲストハウス含む)

3. まとめ

本プロジェクトの成果は全てデジタル情報となっているため、整理された地域情報の全体像はWikipediaの各記事、およびOpenStreetMapの東山七条・東山三条周辺にアクセスして参照いただきたい。今回もっとも地域に貢献できたのは、ウェブ上で同名の観光寺と間違われることが多くて困っていた東山三条の金剛寺のWikipedia記事を本学の学生たちが執筆したことである。WikipediaとOpenStreetMapで「何がどこにある」という地域情報が整理され、地域のオープンデータが充実していけば、今度はそれらを活用して地域の新しいビジネスやユニークな活動が生まれていく。初年度であるため学生の参加は決して多くはなかったが、1回生からの参加もあり、継続して参加してくれる学生も出てきた。オープンデータの編集は学生たちにとって発信者としての責任を強く実感する学習機会となるため、地域情報のオープンデータ化を今後も継続していきたい。

謝辞

本プロジェクトに協力くださったオープンデータ京都実践会・Miya.m氏(Wikipediaのレクチャー、編集サポート)、オープンデータ京都実践会・坂ノ下氏勝幸氏(OpenStreetMapのレクチャー、編集サポート)、京都市東山図書館と京都府立図書館(関連文献)、前東山区長・鷲頭雅浩氏(まち歩きガイド)、金剛寺・中村徹信住職(会場提供)、白川まちづくり会社・鈴木淳之氏(まち歩き)に心より感謝申し上げる。

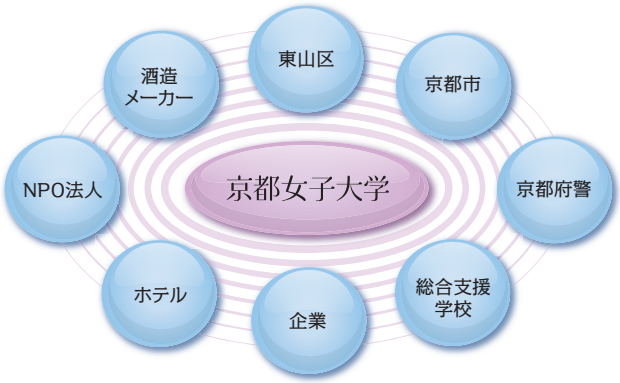
連携先・地域とともに多様な活動を展開

第2回京女ラウンドテーブル

「京女ラウンドテーブル」とは、包括協定先と大学の間の情報交換に加え、通常では接点を持つ機会の少ない包括協定先諸機関同志のネットワーク形成に大学が何らかの役割を果たすことができないかとの意図で、平成28年度より組織された協議機関である。第2回目となる平成29年度は、東山区役所をはじめとした14の機関・企業より22名が参加して開催された。今年度は2部構成とし、第1部の包括協定先と大学関係者の協議の場に加えて、第2部の教員と学生による連携プロジェクト報告会に参加いただいた。

第1部では、京都女子大学との連携活動に加えて本学の教育課程全般についてご意見・ご要望をお伺いするとともに、今年度の共通テーマとして「地域防災」を取り上げ、意見交換を行った。

ラウンドテーブル概念図



◆教育課程について

竹安栄子地域連携研究センター長より、本学の教育課程の中でも2017年度共通領域に新設された「連携活動科目」について説明を行った。「連携活動科目」は、「導入科目」、「展開科目」、「演習科目」の3つの科目群から構成されている。さらに展開科目は、「地域連携講座」(4科目、平成29年度はその内2科目開講)と「産学連携講座」(6科目、平成29年度はその内5科目開講)から成っている。「地域連携講座B2」は「京都の社会と連携活動」との副題の下、合計10の包括協定先の企業や自治体からゲストスピーカーとして登壇いただいて、京都の多様な側面についてそれぞれの機関の実務者から講義してもらう授業である。また「産学連携講座」は5科目全て包括協定先の企業の寄附講座で構成されている。ラウンドテーブルでは、「連携活動科目」の修得によってどのような人材養成を目的として設置しているのかについて説明し、参加機関より今後の進め方についてご意見を頂いた。

◆地域防災について

まず、東山消防署警防課消防係長湯淺健司氏より、東山区の現状と地域防災の課題について説明を受けた。1200年の都である京都は、「災害が少ない街」とのイメージを持たれる傾向にある。しかし、平安時代より様々な文書の中に京都で発生した地震についての記載が残されている。また京都の寺社などにも地震災害にまつわる言い伝えが残されていて、決して過去に地震が発生しなかった土地ではないことが文献に基づいて説明された。特に東山区には災害危険地域や花折断層が走っていて、いつ大規模な災害が発生しても不思議ではない、と災害に対する意識啓発がなされた。

続いて京都女子大学の防災担当者である吉川総務部長より、京都女子大学の防災への取り組みの現状と懸案事項について報告した。京都女子大学は、花折断層の上に位置しているうえ、キャンパス内には災害危険地域も含まれている。この状況を踏まえて、地震発生後の対応を大学が取り組むべき重要課題と認識している。現在、5,200人3日分の食糧・飲用水、毛布などの備蓄を確保しているが、トイレの問題などまだまだ対応は端緒についたばかりである。また本学体育館は災害時の民間避難所に指定されている。ぜひ今年は地域住民の方にも参加していただいて、避難所訓練を実施したいと考えている。さらにT校舎は災害時の妊産婦・乳幼児とその母親の避難所に指定されているが、その対応は何も手が付いていないのが現状である。今後、包括協定先の諸機関、地域住民の皆さんの協力を得ながら、災害発生時の対応を一歩一歩着実に進めていきたいのでご協力をお願いしたい、と参加機関への協力の要請を行った。

◆参加機関からの要望・評価について

教育課程(地域連携・産学官連携活動)とラウンドテーブルについては次のような要望や評価が寄せられた(一部省略)。

＊教育課程(地域連携・産学官連携活動)について

- 他大学と較べても「大学として取り組んでいる」姿勢が出ていると感じる。
- 地方自治体から民間企業まで幅広く授業に関わっていることが学生に良い刺激になっていると思う。
- 産学連携講座を担当している企業同士のコミュニケーションをもっと取りたい。
- 全15回の講義を担当させていただいて、良い社内整理となると共に、学生からコメントをいろいろいただけたの

は良かった。

＊ラウンドテーブルについて

- 「大学教育のために企業側ができること、やるべきこと」などを共有することで、連携の効果はさらに高まる。授業のノウハウなども相談できる。その意味で「ラウンドテーブル」の機会は貴重だ。
- 今回のラウンドテーブルのテーマにもなっていた「学校と地域の防災」について、我が社も価値提供できるように努めたいと思う。

＊第2部地域連携活動報告会について

- 大学の試みがよく見えて、参考になった。
- 女子学生らしい活動を展開されていることを改めて感じる。

＊京都女子大学との研修での連携についての可能性

「社会人のキャリア開発に関する学習機会」や「大学の教員等による企業への出張講義（学習機会の出前）」に期待するとの声が寄せられた。

第1部プログラム概要

○開催日時：平成30年3月9日㈮13時～14時30分
○開催場所：京都女子大学　A校舎5階会議室
○次第：

1.開会挨拶　京都女子大学　林 忠行

2.各機関紹介

3.教育課程についての説明
　地域連携研究センター長　竹安 栄子

4.地域防災について
　東山消防署 警防課消防係長　湯淺 健司

5.京都女子大学の地域防災について
　総務部長　吉川 大栄

6.参加者からの意見聴取

○参加企業・官公庁・団体

株式会社 三井住友銀行
阪急電鉄株式会社
株式会社 京都銀行
株式会社 朝日新聞社
大阪ガス株式会社
齊藤酒造株式会社
NPO法人京都景観フォーラム
ハイアットリージェンシー京都
ムーンバット株式会社
東山区役所
東山消防署
京都刑務所
京都市中央卸売市場
京都市立東山総合支援学校

合計14自治体・企業・団体（順不同）/ 合計22名参加

京女ラウンドテーブル第2部
連携プロジェクト報告会

学内で公募した「学まち推進型」連携活動補助事業について、代表教員、活動に参加した学生などによる報告会を開催した。当日は「京女ラウンドテーブル」に参加した自治体、企業、団体の方々にも多く来場いただいた。各々のプロジェクトについて、この1年間取り組んだ活動内容が発表された。参加した学生にとっては資料をまとめ、学内外の多くの聴衆を前にプレゼンテーションを実際に体験できる貴重な機会となった。当日会場では、活動についてまとめたポスターや作品の展示も行い、終了後には、熱心に見入り、発表者に質問する来場者の姿も見られ、また、連携機関の担当者が情報交換したり、プロジェクト代表教員と新たな活動について話をする機会となり有意義だった。参加者からは「とても熱心に取り組まれており、京女のアピールポイントになっていくのでは」「他大学に比べても大学一体として取り組んでいる姿勢が出ている」等の感想が寄せられた。来年度も引き続き、連携プロジェクト報告会を継続する予定である。

▼発表風景

第2部プログラム概要

○開催日時:平成30年3月9日㈮
　14時35分-16時30分
○開催場所:京都女子大学図書館交流の床1階ホール
○プロジェクト発表:

◇学まち連携プロジェクト報告

1.京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ
　矢野 真 発達教育学部 教授

2.現代のライフスタイルに合った綴織の商品開発
　青木 美保子 家政学部 准教授

3.馬町空襲の歴史を学び語り継ぐ取り組み
　坂口 満宏 文学部 教授

4.「東山に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト
　森久 聡 現代社会学部 准教授

5.京女まち歩きオープンデータソン
　桂 まに子 図書館司書課程 講師

6.乳幼児期の子ども・子育て支援実践と、支援者養成
　瀬々倉 玉奈 発達教育学部 准教授

◇学長採択型 正課外活動促進補助事業報告

1.東山地区を中心とした多言語観光案内標識の整備プロジェクト
　金 情浩 文学部 准教授

2.福祉と地域をつなぐ商品デザイン提案と福祉施設との商品共同開発
　宮原 佑貴子 生活デザイン研究所 非常勤研究員

▼ポスター・展示

大学・地域連携サミットに参加

11月12日㈰、キャンパスプラザ京都にて、第1部「活動事例報告」第2部「ポスターセッション」の2部構成で開催された。

第1部

「学まち連携大学」促進事業採択校（6大学）が参加し、1大学9分の持ち時間の中で教員と学生が本学の取組について報告を行った。本学の事例報告の概要は以下のとおりである。

【教員より報告】

- 教育課程の構築（「地域系女子養成プログラム」）、多様な連携活動（「学まち連携プロジェクト」）、ネットワークづくり（京女ラウンドテーブルの組織化）について

【学生より報告】

- 「地域連携講座B2を受講して～地域社会の視点から見つめる～」
- 「祇園新橋景観保全キャンペーンについて」
- 「KWU小学生プログラミングコンテストを実施して」

第2部

「ポスターセッション」には、本学から3つのプロジェクトが参加し、教員と学生が取り組んできた連携活動の成果についてポスター発表を行った。来場された方が教員や学生に話しかけてくださる姿も見られ、各々の活動について広く知っていただく機会となった。

ポスターセッション後の交流会では、各団体の活動内容や抱えている課題などについて意見や情報の交換を行い、連携活動に取り組む他大学の参加者と交流することができた。今回のポスターセッションと交流会は、参加学生たちが多くの刺激を受け、視野が広がる良い学びの場となった。

【プロジェクト名及び発表団体】

◆「福祉施設と学生の商品共同開発プロジェクト」:京都女子大学 福祉施設との共同商品開発デザインチーム（まごころプロジェクト）

◆「京都の伝統染色産業と学生のデザインプロジェクト」:京都女子大学 伝統をつなぐ会

◆「東山地区を中心とした多言語観光案内標識の整備プロジェクト」:京都女子大学 文学部 外国語準学科

メディアセッション京都にパネリストとして参加

京都に基盤を置く大学ならびに企業を対象に「ともに考え、ともにつくる」メディアのあり方を考える場として「メディアセッション京都」は産声をあげた。11月20日㈪、朝日新聞京都総局で行われた第4回会合で地域連携研究センター長　竹安 栄子が、パネリストとして登壇し、ロフトワーク代表取締役　諏訪 光洋氏、朝日新聞社 京都総局記者 大村 次郎氏とともに、「京都で発信する意義、共創の場づくりとは」というテーマでディスカッションを行った。本学の地域連携活動を広く参加者に知っていただく機会となった。

京都女子大学地域連携研究センターシンポジウム

京女が紡ぐ京の観光と食文化

「学まち連携大学」促進事業がスタートして2年目を迎える今年、包括連携協定先であるハイアットリージェンシー京都の共催を得て「京女が紡ぐ京の観光と食文化」と題したシンポジウムを開催した。このシンポジウムは、日頃の連携活動の成果を一般の市民の方に知っていただき、その成果を還元することを目的に、「観光」と「京都の食文化」という広く興味を持っていただけるテーマで企画した。

「学まち連携大学」促進事業の活動先から登壇者を得て、第1部では「京都の観光」について、様々な視点から問題提起を行った。観光都市で生活する市民からみた観光地京都の現状報告は、今後の京都を考えるにあたって示唆に富むものであった。

第2部では、京都の観光の魅力の一つである京料理と伏見の酒について、ハイアットリージェンシー京都の副料理長と招徳酒造㈱社長から解説を聞いて、第3部で試食・試飲するという試みに、参加者から次回も開催してほしいとの声が寄せられた。

第3部の体験では、ハイアットリージェンシー京都 日本料理 東山 副料理長 三輪 篤史氏提案の京料理に合わせ、日本酒利き酒師山内 美和氏が選んだ京都の蔵元の酒5種及び山内氏の故郷・長崎の酒1種を、酒造りについての知識、説明を聞きながら試飲した。女性杜氏が増えつつあること、京都の酒は兵庫に次ぐ2位の生産量であること、酒米のことなど、京の食文化を体験しながら、京都の酒について幅広い知識を得る機会となった。

来場者アンケートでは、テーマや講演への満足度が非常に高かった。

プログラム概要

開催日時 平成30年2月7日㈬ 13:30～17:00

第1部【講演】

「世界展開するホテルから見た京都の美」
(通訳付き)

ハイアットリージェンシー京都 総支配人 ミリアム バロリ 氏

「京都の観光と市民生活」

祇園新橋景観づくり協議会代表 料理旅館白梅 女将
奥田 朋子 氏

※観光客急増による課題と、特に今課題となっている前撮り業者への取り組みについて説明があった。決して排除という方向ではなく、いかに、景観を共有できるか模索したいとの考えを述べられた。

「京都は外国人観光客に優しい街か～東山地区を中心とした多言語観光案内標識の整備プロジェクトを例に～」

京都女子大学文学部准教授 金 情浩 氏

※当日、会場では、発表内容のパネル展示も行った。

第2部【講演】

「京料理への想い」

ハイアットリージェンシー京都 日本料理 東山 副料理長
三輪 篤史 氏

「京都・伏見の酒 歴史とこれから」

招徳酒造㈱ 代表取締役 木村 紫晃 氏

第3部【体験】※有料(一人3,000円)

「京の食文化体験講座」

説明者:NHK京都放送局放送部 リポーター・日本酒利き酒師
山内 美和 氏

国際女性デー記念シンポジウム

地域社会における女性の活躍
～女子大学における教育の使命～

国際女性デーに合わせ、女性地域リーダーの養成に女子大学が果たす役割について考えるシンポジウムを開催した。このテーマ設定の背景には、地域社会の活動に活発に従事する女性が増えた一方で、意思決定の過程が、まだまだ男性に占められているという現状がある。

シンポジウムへは約90名と予想以上の来場者を得ることができ、講演や議論に熱心に耳を傾けていただいた。

はじめに、林学長の挨拶では、1917年3月8日は、ロシア革命の日であり、ロシアの首都ペトログラードの女子紡績工の「もっとパンを!」とういう動きが革命に繋がっているという説明があった。ヨーロッパでは、女性をたたえる日として認識されているこの日に記念シンポジウムを行うことで、まだ女性の政治リーダーが非常に少ない日本の現状について色々と考えていただく機会になれば有難いと述べられた。

橘木客員教授の「フェミニズムを通り越し、男は要らない、女の社会になる。」と男性を一刀両断し始まった基調講演は、たいへん興味深く感じた方が多く、参加後のアンケートでは、高い評価を得た。講演内容の詳しくは『男性とう孤独な存在　なぜ独身が増加し、父親は無力化したのか』(PHP新書)で記されていると紹介があった。

パネルディスカッションでは、日本では、男性がリーダーになる経験に比べて、女性にはまだまだその機会が少ないことなど現状についての討論が展開された。このような状況にある日本においては、女子大学が果たす教育の役割は大きいという今回のテーマに、共感される参加者が多くみられた。一方、もう少し長い時間、ディスカッションを聞きたかったという意見もあった。

シンポジウム最後には、International Women's Dayへの参加プラカードを参加者で掲げ、From Kyoto Women's Universityのメッセージを、インスタグラムで世界に向けて発信した。

告知ポスター

プログラム概要

○開催日時：平成30年3月8日㈭　14:00～16:30

○開催場所：京都女子大学図書館
交流の床1階ホール

第1部 基調講演

「家族の変容と女性の役割」

京都女子大学客員教授 橘木 俊詔 氏

第2部 パネルディスカッション

①「女性のリーダーシップと地域社会の未来
～国際的な観点から～」

一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター所長
三輪 敦子 氏

②「女性に魅力的な地域社会を創るために」

京都女子大学 地域連携研究センター長 竹安 栄子 氏

③「女子大学における法学部教育の挑戦」

京都女子大学法学部准教授 前田 直子 氏

モデレーター 京都女子大学発達教育学部教授 表 真美 氏

パネリストが揃いタペストリーの前で

プラカードを掲げる参加者たち

市民とともに、まちづくり活動

祇園新橋景観づくり協議会

NPO法人京都景観フォーラムとの包括的な連携協定締結を機に、祇園新橋景観づくり協議会の設立に向けた会議や元吉町まちづくり部（現、祇園新橋まちづくり部）の定例会議に昨年度より参加している。この地区は、祇園新橋伝統的建物保存地区の指定を受けており、洗練された町家や石畳、ほとりを流れる白川、地域の守り神である辰巳大明神など最も京都らしいと言われている景観や風情を地域住民が中心となり守り続けている。

◇祇園新橋まちづくり協議会の設立と計画書作成

地域住民が主体となった熱心な活動が実を結び、5月26日㈮に協議会の認定式が執り行われた。新しい店舗の進出が増える昨今、京都市での許認可手続きの前に、新築、改装、屋外広告の設置、外観維持などについて協議会と話し合うためのガイドラインとして、「祇園新橋景観づくり計画書」作成に取り組んでいる。会合では、常に活発な意見交換がなされている。

祇園新橋景観づくり協議会認定式

◇地域の核となる辰巳大明神

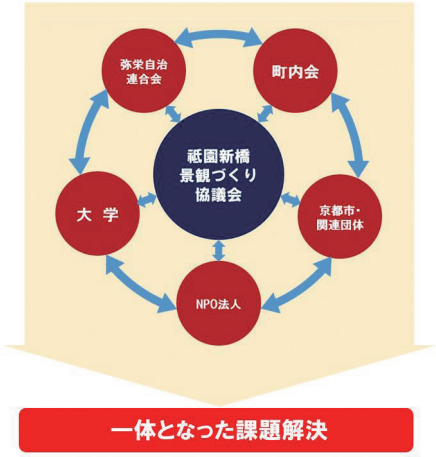
何世代にもわたり受け継がれている辰巳大明神の地域のおまつり行事は、新しい住民たちも参加し、地域でのコミュニケーションを深めるという機能を果たしている。このおまつり行事のお手伝いとして、現代社会学部森久ゼミの学生が参加出来たことは、伝統文化や地域連携を知る上で、たいへん貴重な体験となった。

◇地域の課題、結婚式「前撮り」への取り組み

観光客の急増により、私有地路地へ無断で立ち入ったり、道路を長時間占拠するなどの行為が増え、住民が迷惑を被るようになっていた。また、数メートルおきに、和装やドレスを着用した人や撮影クルーが並び、祇園新橋の風情にそぐわない、危険であると課題になっていた。この課題解決に取り組む第一歩として、6月12日㈪14時～16時まで地

域住民、NPO法人京都景観フォーラム、景観を考えるフォトグラファーの会、京都女子大学現代社会学部の学生が協力し、撮影マナー向上を訴えるちらしを配布した。ちらしは、日本語に加え、英語、中国語も併記した。なお、現代社会学部学生35名は、観光客への聞き取りを行い、実地調査の体験も行った。この様子は、テレビ局、新聞社などマスコミにも注目され、教員、学生も取材を受けた。なお、キャンペーンをきっかけとして、路上に毛氈を敷いての撮影など目に余るマナー違反は激減したようだ。現在、次のステップとして、前撮り業者間で、自主的に撮影マナー向上に取り組んで貰うことをねらいとし、協議会の提案する撮影マナーに賛同する事業者に腕章を配布している。祇園新橋で撮影する業者を組織化するきっかけづくりに役立て、協議会とともに、撮影マナーや景観づくりを考える場となることを願っているが、腕章を受け取った事業者の全てが、撮影マナーを遵守するには至っていない。

祇園新橋の風情を後世に残したいという協議会の熱意ある活動は、今後、景観保全に取り組む市民活動のモデルケースとなることが期待できそうだ。



弥栄自治連合会 ～すこやか学級～

中高齢者の居場所づくり、ふれあい・健康づくり地域連携活動「弥栄すこやか学級」の活動支援を平成28年度から開始している。

本年度は、文学部教授　劉 小俊先生による「やさしい中国語講座」を2回、昨年度に引き続き発達教育学部教授　ガハプカ 奈美先生による「健康づくりのための呼吸法」を3回、年間合計6回の講座を実施した。「やさしい中国語講座」では観光客が多い地域特性を反映し、「こんな時はどう言えばいいの?」といった質問が初回からみられ、積極的に参加いただけた。呼吸法では、「呼吸法で習ったことをすると、体が暖かくなる、気持ちよくなる。」「昨年から自宅で続けている。」といった評価する感想が多く聞かれ、利用者との交流をはかることができた。

京都洛東ロータリークラブ 創立30周年事業

7月31日㈪、京都洛東ロータリークラブの創立30周年記念事業として、子どもたちに多様な文化的活動に参加する機会を設け、文化を学ぶことの大切さを啓発し、日本の文化を大切にする心、子どもたちの健全な発育を促進することを目的とした「京の伝統文化と子供モノづくり体験」が京都国立博物館で開催された。

本学からは、落語研究会、ダンスクラブUnlimited∞（ダンスクラブ アンリミテッド）、Wind Orchestra（ウィンドオーケストラ）が平成知新館講堂で公演し、会場を盛りあげた。

ステージを見た子どもたちからは「落語を見たのは初めてだけど面白かった。」「ダンスや楽器などのステージを見て、自分もやってみたくなった。」など評価する感想を聞くことができた。参加した学生からは、「地域に出かけて喜んでいただける機会にはまた、是非参加したい。」と地域活動へ今後参加することに、意欲的な意見が多く聞かれた。

また、ワークショップコーナーには、本学生活デザイン研究所が「はり絵作品づくり」を出展し、参加の子どもたちにモノづくりの楽しさを体験してもらうことができた。

七條大橋をキレイにする会（NPO法人京都景観フォーラム）

七條大橋をキレイにする会は、毎月7日に清掃活動を実施し、戦時中に撤去された高欄・照明柱の復元を目指すなど、企画イベントや広報活動などを通して、七條大橋の景観的価値を高めるための様々な活動を行っている。12月7日㈭、連携活動入門を受講する学生有志10名が、30回目を迎えた清掃活動に参加した。地域で活動を支えていらっしゃる方々と話した学生たちは、京都の景観を支える担い手として、市民が大きな役割を果たしていることを実感したようだ。参加した学生からは「日頃あたり前だと思って生活していることはいろんな人の支えがあって成り立っていることがわかった。」との地域貢献活動の大切さに気づく感想が聞かれた。

学生主体の連携活動

酒造り体験

今年度も協定先の酒蔵で酒造り体験を受け入れていただいた。

◇招德酒造㈱
〈第一期〉平成30年2月8日㈭～10日㈯3名
〈第二期〉平成30年2月15日㈭～17日㈯2名

◇齊藤酒造㈱
平成30年3月26日㈪～28日㈬3名

【学生の感想（一部抜粋）】

- 日ごろ、身近なところにあるものがどのように作られているのかを関心を持って知ろうと思わなければ、こんなにも知りえないことがあることに驚いた。これからは様々なことに興味関心を持とうと思える視野の広がる、素晴らしく貴重な体験だった。
- 見学だけでなく、実際に麹の切り替えや麹剥がしをはじめ様々なことを体験させていただき、勉学だけでは学ぶことができないお酒造りの楽しさを味わうことができた。

京都市中央卸売市場

京都女子大学は、市場の活性化・地域の活性化及び食育の推進を目指し、京都市中央卸売市場と包括連携協定を結んでいる。今年度も以下のイベントに参加した。

・食育イベント 参加（食物栄養学科 中山ゼミ）
平成29年10月8日㈰

食育の推進と魚食普及の拡大を目的として、同じく京都市中央卸売市場と協定を締結している京都聖母女学院短期大学・平安女学院大学・京都府立大学の学生との合同企画によるイベント「あそぼう!まなぼう!あじわおう!『京の食育ワンダーランド』」に参加した。本学食物栄養学科の学生は、実際に試食した魚を当てる「Tasting me!! 食べた魚は何だろう?」企画や、「食育」コーナーを担当した。

子どもからお年寄りまで幅広い世代の方が参加され、好評だった。

・市場まつり 参加（食物栄養学科 中山ゼミ）
平成29年11月23日㈭・㈷

京都市中央卸売市場第一市場で、市場開設90周年の記念イベント「市場まつり」（例年の「鍋まつり」）に参加した。

本学は「鍋ブース」に出展し、食物栄養学科の学生が企画・提案した鍋料理「甘鯛にゅうめん」が販売され、来場者の皆さまに大変ご好評をいただいた。

・すし市場「まちおこし寄席」前座での公演（落語研究会）

昨年度に引き続き、今年度もすし市場「まちおこし寄席」の前座で落語研究会が落語を披露した。プロの落語家の前座を務める貴重な経験となった。

KWU小学生プログラミングコンテスト開催

小学校におけるプログラミング教育の推進のために、小学生を対象としたプログラミングコンテストおよびコンテスト応募に向けたプログラミングワークショップを学生主体で行った。

作品応募期間：平成29年7月15日㈯～9月3日㈰
第一次審査（書類審査）応募総数：12作品
平成29年9月16日㈯
第1回KWU小学生プログラミングコンテスト
第二次審査（公開審査）　第一次審査通過者数：5作品
最優秀賞／京都市教育長賞　1名、優秀賞　2名、アイディア賞1名、アイディア賞／プレゼン賞　1名

小学生対象の英語イベント

平成29年11月17日㈮

北九州市の敬愛小学校3年生の児童対象に英語交流イベントを開催した。

本学英文学科木村マリアン先生とジョン・カンベル・ラーセン先生の授業に児童が参加し、本学学生と英語のアクティビティを楽しんだ。

履修証明プログラム

京都女子大学は、平成27年度より学校教育法の定めにもとづき、大学での一つのまとまりのある学習プログラムとして履修プログラムを開設している。
当該プログラムは、本学の授業科目とプログラム独自の講習を組み合わせて履修することによって、体系的な知識や技能の習得を図るもので、その成果として京都女子大学が学校教育法第105条の規定にもとづく履修証明書を交付している。

平成29年度履修証明プログラムについて、6名の受講生が修了した。

平成30年2月14日㈬に修了式を開催した。

修了者
仏教プログラム　1名
京都マイスター養成コース（初級）2名
京都日本語案内マイスター養成コース（初級）2名
中国文化と言語プログラム　1名

【修了者の感想】

- いつも授業は最前列で聞いていた。自分にとってチャレンジだったが、学ぶことが嬉しかった。
- 楽しい学びに浸っていた。仲間がいるのが励みになった。
- 授業がハードで大変だったが、支えていただいたき、じっくり学ぶことができた。

修了式の様子

新たな大学間の連携を展開

奈良女子大学との連携

本学と連携協定を締結している奈良女子大学と合同シンポジウムを開催した。

当日は、大学関係者や学生など、約70名の来場者があり、女子大学の社会的な使命や役割について活発な質疑応答が行われた。また、シンポジウム終了後の交流会では、和やかな雰囲気の中、これからの女子大学に関する期待について意見交換が交わされ、日本の女子大学のネットワーク化について話題が盛り上がった。

1. 日時　平成29年12月9日㈯14:00～16:45
2. 場所　奈良女子大学 記念館2階講堂
　(奈良市北魚屋東町)
3. テーマ　「女子大学は生き残れるか?」
4. プログラム
   - 「秘密の花園」から秘密基地へ
     大島 美穂　津田塾大学 副学長
   - グローバル化時代の女子大学
     林　忠行　京都女子大学 学長
   - 女子学生と女子大学のフロンティア
     今岡 春樹　奈良女子大学 学長
   - ディスカッション

奈良先端科学技術大学院大学との協定

平成29年7月24日㈪、京都女子大学と奈良先端科学技術大学院大学は、教育・研究活動の活性化を目的に包括協定を締結した。

協定締結式

両大学の教職員・学生・大学院生の交流を推進し、教育・研究に関する分野で協力しあうことで、出身学部の系統を超えて幅広い視野を持った文理融合型の理系人材の育成を目指している。

京都府立医科大学との協定

平成30年3月26日㈪、京都女子大学と京都府立医科大学は、教職員・学生・大学院生の相互交流の推進、教育・研究に関する協力等、広く連携を図り両大学のさらなる発展を目的として包括協定を締結した。

具体的には、公認心理師養成のための臨床実習受け入れや緩和ケアに係る心理学的アプローチへの協力等を予定している。

協定書調印式

武庫川女子大学とのSDに関する協定

平成29年7月11日、京都女子大学と武庫川女子大学はSDにおける連携協力に関する協定を締結した。本協定は、両大学が相互に協力してSDを行い、職員の能力向上を図ることを目的としている。

平成29年5月31日㈮に武庫川女子大学で合同の第一回SD研修が開催された。

京都の女子大学から全国の女子大学へ…
“東京に集う”女子大学連携のためのキックオフミーティング開催

京都アカデミアフォーラムに参加する京都の3女子大学が中心となり、全国の女子大学とともに、これからの女子大学が取り組む課題について、情報交換を行い、連携協力体制を構築していく出発点として、女子大学連携のためのキックオフミーティングを3月22日㈭に開催した。京都光華女子大学加藤千恵教授から、今回のキックオフミーティング開催の主旨について説明がなされた後、ワールド・カフェ方式で参加者が小グループに分かれて、活発な議論が行われた。日本の女子大学が果たす役割を共に考え、語り、発信し、学術的成果を提示するとともに、社会貢献の足掛かりとしていく。2018年度は、本ミーティングを呼びかけた京都光華女子大学、同志社女子大学、京都女子大学の3大学が幹事校として運営に携わることになった。

当日は、25大学から50名の参加者があり、今後9月には全体研究会を、来年3月国際女性デーの頃にはシンポジウムを京都で開催する予定である。

なお、このキックオフミーティングは、京都府内の6女子大学の教員が一同に会するきっかけとなった。

【幹事校:五十音順】

京都光華女子大学　女性キャリア開発研究センター
京都女子大学　地域連携研究センター
同志社女子大学　女性アクティベーションセンター

京都アメリカ大学コンソーシアム(KCJS)との交流会

本学は京都アメリカ大学コンソーシアムと平成29年4月21日に包括連携協定を締結した。平成元年に設立されたKCJSは、米国のアイビーリーグ13大学のコンソーシアムで、京都の歴史的・文化的な資産を生かして、高度な教育環境を提供し、学生同士の知的で文化的な交流を広くすすめている機関である。包括連携協定のもとに、6月7日(水)KCJSの留学生と、現代社会学部戸田ゼミの3回生が交流会を持った。12時45分から始まった交流会では、まず、自己紹介のあと、女性の政治参加について、戸田ゼミの学生は日本を事例として、KCJSの留学生は米国、ドイツ、韓国、中国を事例として発表した。発表のあとは、4名ずつのグループに分かれてディスカッションを行ったが、どのグループも活発に意見交換がされ、あっという間に14時半の閉会を迎えた。交流会後は、和気あいあいとグループごとに写真を取り合ったり、雑談する姿がみられた。今回は、コロンビア大学、イエール大学など6大学、合計8名の留学生と交流することができた。

留学生とのディスカッション

2017年度

主な活動実績

「学まち連携大学」促進事業

京女ラウンドテーブル

平成30年3月9日㈮

本学で京女ラウンドテーブルを開催した。本学と連携協力関係にある企業・官公庁など14機関22名の出席があり、第1部では、地域防災への取り組みや本学の教育課程等について意見交換を行った。第2部は、本学教員や学生による地域連携活動の取り組みについてプロジェクト報告会を行った。「馬町空襲の歴史を学び語り継ぐ取り組み」や「現代のライフスタイルに合った綴織の商品開発」等、8件の報告がなされた。

「学まち連携大学」促進事業

シンポジウム

・平成30年2月7日㈬ 京都女子大学地域連携研究センターシンポジウム「京女が紡ぐ 京の観光と食文化」開催

・平成30年3月8日㈭ 国際女性デー記念シンポジウム「地域社会における女性の活躍～女子大学における教育の使命～」開催

「学まち連携大学」促進事業

会議・報告会

・平成29年11月12日㈰ 大学・地域連携サミットへの参加

・平成29年11月20日㈪ メディアセッション京都への参加

・平成30年3月9日㈮ 連携プロジェクト報告会の実施

「学まち連携大学」促進事業

地域との連携活動

祇園新橋景観づくり協議会
(NPO法人 京都景観づくりフォーラム)

・毎月の定例会議への参加、平成29年5月26日㈮ 景観づくり協議会認定式参加、平成29年6月12日㈪ 祇園新橋景観保全キャンペーン実施など

弥栄自治連合会すこやか学級

・文学部 教授　劉 小俊先生による「やさしい中国語講座」2回実施

・発達教育学部 教授　ガハプカ 奈美先生による「健康づくりのための呼吸法」3回実施

幼稚園、保育園、児童館など

・京都女子大学人形劇団たんぽぽによる訪問上演活動

東山南部活性化委員会

・定例会議への参加、平成29年10月29日㈰ 太閤まつりへの協力(台風のため中止)

京都洛東ロータリークラブ

・平成29年7月31日㈪ 創立30周年記念事業に協力参加

七條大橋をキレイにする会
(NPO法人京都景観づくりフォーラム)

・平成29年12月7日㈭ 第30回に参加

「学まち連携大学」促進事業

企業・自治体・学校との連携活動

酒蔵:酒造り体験

◇招徳酒造㈱

〈第一期〉平成30年2月8日㈭ ～10日㈯ 3名
〈第二期〉平成30年2月15日㈭～17日㈯ 2名

◇齊藤酒造㈱

平成30年3月26日㈪ ～28日㈬ 3名

京都市中央卸売市場

・平成29年10月8日㈰
京都聖母女学院短期大学・平安女学院大学・京都府立大学の学生との合同企画によるイベント「あそぼう!まなぼう!あじわおう!『京の食育ワンダーランド』」参加(食物栄養学科 中山ゼミ)

・平成29年11月23日(木・祝)
市場開設90周年の記念イベント「市場まつり」(例年の「鍋まつり」)参加(食物栄養学科 中山ゼミ)

京都市内小学校

平成29年9月16日㈯ 第1回KWU小学生プログラミングコンテスト開催

「学まち連携大学」促進事業

大学との連携活動

京都アメリカ大学コンソーシアム（KCJS）

・平成29年6月7日㈬ 留学生との交流会

・その他、KCJSのプログラムに参加する留学生の会話パートナーやKCJS主催留学生イベントへの参加など、連携活動を実施。

奈良女子大学

・平成29年12月9日㈯ 奈良女子大学・京都女子大学包括交流シンポジウム「女子大学は生き残れるか?」開催

女子大学連携

・平成30年3月22日㈭「女子大学連携のためのキックオフミーティング」の開催
（幹事校:京都光華女子大学・同志社女子大学・京都女子大学）

その他の活動

小学生対象の英語イベント

平成29年11月17日㈮

北九州市の敬愛小学校3年生の児童対象に英語交流イベントを開催。

履修証明プログラム

平成29年度修了者

仏教プログラム　1名

京都マイスター養成コース（初級）2名

京都日本語案内マイスター養成コース（初級）2名

中国文化と言語プログラム　1名

協定締結先一覧

	協定締結先	協定締結日
1	京都信用金庫	2004/10/18
2	東山区役所	2008/2/26
3	近畿中国森林管理局（遊々の森）	2008/9/16
4	京都大学（大学院生命科学研究科）	2010/6/1
5	東山区社会福祉協議会	2010/10/4
6	京都市中央卸売市場第一市場	2013/11/5
7	東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会	2014/10/1
8	京都府警察本部	2014/11/7
9	阪急電鉄	2015/3/26
10	鳥取県、（公財）ふるさと鳥取県定住機構	2015/6/29
11	招徳酒造株式会社	2015/9/18
12	齊藤酒造株式会社	2015/9/18
13	株式会社朝日新聞社	2016/1/20
14	野村證券株式会社	2016/2/1
15	株式会社三井住友銀行	2016/7/8
16	京都刑務所	2016/7/27
17	奈良女子大学	2016/9/23
18	京都市立東山総合支援学校	2016/10/13
19	株式会社京都銀行	2016/12/8
20	京都励学国際学院	2016/12/14
21	NPO法人京都景観フォーラム	2017/1/17
22	ムーンバット株式会社	2017/2/6
23	ハイアットリージェンシー京都	2017/2/15
24	大阪ガス株式会社	2017/2/17
25	京都アメリカ大学コンソーシアム	2017/4/21
26	5×Ruby Inc.	2017/5/15
27	武庫川女子大学（SDに関する協定）	2017/7/11
28	奈良先端科学技術大学院大学	2017/7/24
29	オムロンパーソネル株式会社	2018/3/2
30	京都府立医科大学	2018/3/26

京都女子大学地域・産学官連携ポリシー

（平成29年2月9日制定）

京都女子大学は、創立以来、女性教育のパイオニアとして多様な分野で活躍する女性を輩出してきました。

本学では親鸞聖人の体した仏教に基づく教育を行うことを建学の精神としています。その目的は、人間教育にあります。仏教を通して自己を見つめ自己中心的な姿を明らかにします。互いが自己中心的存在であることを認め信頼関係を構築していきます。現実の諸問題に対しても、問題の本質を捉え、積極的に取り組む人間形成を目指した教育を実践しています。

この建学の精神に則り、京都女子大学は、地域社会、国と地方公共団体、産業界、そして国際社会の発展に寄与する地域・産学官連携を教育と研究に並ぶ大学の使命の一つとして位置付け、この使命を実現するための基本方針として、以下の通り「地域連携ポリシー」および「産学官連携ポリシー」を定めます。

《地域連携ポリシー》

1. 本学の建学の精神に鑑み、地域社会との持続的な連携を行い、地域社会の活性化のために貢献します。**（社会貢献）**
2. 地域連携活動を通じて、地域に関する教育・研究の進展を図るとともに、地域社会の発展に貢献できる女性人材を育成します。**（教育研究促進・人材育成）**
3. 地域連携により得られた知の成果を広く社会に還元し、地域社会と地域課題の共有に努めます。**（地域課題の共有）**
4. 地域連携活動を積極的に推進するための活力ある組織運営を行います。**（体制整備）**
5. 地域連携活動を大学の自己評価に反映させます。**（自己評価）**
6. 本学の地域連携活動を大学の内外に向けてわかりやすく発信します。**（情報公開・広報活動）**

《産学官連携ポリシー》

1. 公的機関・企業等との共同研究・受託研究等を積極的に推進し、社会・経済の発展に寄与するとともに、本学の教育研究活動の基盤向上を図ります。**（共同研究）**
2. 産学官連携活動から得られる成果を本学の教育・研究の促進に役立てます。**（教育研究促進）**
3. 産学官連携活動を通じて、社会の発展に貢献できる女性人材を育成します。**（人材育成）**
4. 本学と公的機関・企業等との組織間の明確な契約による連携を基本とし、産学官連携により得られた知的財産を適切に保護・管理し、有効活用していきます。**（知財管理・活用）**
5. 透明性の高い産学官連携活動を行い、説明責任を果たします。**（説明責任）**
6. 産学官連携活動を積極的に推進するための活力ある組織運営を行います。**（体制整備）**
7. 産学官連携活動を大学の自己評価に反映させます。**（自己評価）**
8. 本学の産学官連携活動を大学の内外に向けてわかりやすく発信します。**（情報公開・広報活動）**

以 上

The Research Center of Community Partnerships

編集・発行

京都女子大学　地域連携研究センター

〒605-8501　京都市東山区今熊野北日吉町35
TEL. 075(531)7080　FAX. 075(531)7064
E-mail: r-suishin@kyoto-wu.ac.jp
URL: http://rccp.kyoto-wu.ac.jp